

山梨県立美術館

研究紀要

第34号

栗田宏一 土と「出会う」まで

研究ノート 医療従事者に対する美術館の役割 -北米の事例を中心に-

「みんなでつくる美術館」の20年を振り返って

太田 智子

下東 佳那

雨宮 千鶴

山梨県立美術館



1

1985 Yamanashi / Photo : Aoyagi Shigeru



2

1987 Zushi / Photo : Komatsu Kazuko

目次／CONTENTS

1. 栗田宏一 土と「出会う」まで	太田 智子	1
2. 研究ノート 医療従事者に対する美術館の役割 – 北米の事例を中心に –	下東 佳那	9
3. 「みんなでつくる美術館」の20年を振り返って	雨宮 千鶴	13
論文要旨／Summaries		28

栗田宏一 土と「出会う」まで

太田 智子

はじめに

当館では令和2年度に特別展「栗田宏一・須田悦弘展－Contentment in the details－」を開催した（会期：2020年11月14日－2021年1月31日）。この展覧会では山梨県出身の二人の現代アーティスト、栗田宏一と須田悦弘を取り上げ、両者の共通点および故郷である山梨とのつながりを読み解くことで、作品の特質と現代における意味を考察した。しかしながら展覧会図録では、二人の作家のこれまでのキャリアについてはごく限られた部分にのみ触れるにとどまった。特に栗田宏一は、日本全国で自ら拾い集めた土を展示する《ソイル・ライブラリー》を発表しているが、そのスタイルを確立するまでにさまざまな表現の変遷を辿って来た点に紙幅を割くことはできなかった。栗田の作家としての活動の初期段階について記述し考察したものとしては、堀愼吉（1936～2003）による「魂のスーパーニール＝栗田宏一の世界」（註1）があるが、他には折々の活動が単発で紹介されるに留まる。また、本人が執筆した口語調の長文テキストや、インタビューなどの中で断片的に語られてきたことはあるが、経歴全体を追い、土の仕事へと至る道をまとめた論考はない（註2）。堀も取り上げた身体表現（パフォーマンス）や、旅の途上で石を拾い続けたことなどは、栗田の現在およびその姿勢の根幹を考える上でも重要であり、その道程には多くの人やものとの出会いがあった。本稿では、まず時系列に従って土と「出会った」1990（平成2）年までの経歴をなぞりつつ、各時期の活動を整理し、その意味を考察してみたい。

金属加工と3つの出会い

1962（昭和37）年に笛吹市に生まれた栗田宏一は、小学生の頃には、近所の野原や畑に落ちている縄文土器の欠片を拾うことに熱中していたという。縄文時代への憧憬は、その後一貫して持ち続けることになるが、その原体験が土器の欠片拾いであった。加えて、一つの対象を（拾って）集め続ける、という行為ともつながっている。手先が器用であったこと、そして銀行員であった父親から「金を扱う仕事はするな」と言われたことから、高校卒業後、1981（昭和56）年に山梨県立宝石美術専門学校に入学する。公立の技術専門学校で、栗田はその一期生に当たる。ここで石や金属の加工技術を学ぶが、天然石がそのままでも十分美しいのに、わざわざ切断、研磨し、別の形状へと加工することに疑問を抱いたという。一方で、同校での学びはその後の制作の下地になっていった。

2年間宝石研磨科に在籍していたが、独自に制作し、作品をコンテストに出品するなどしていた。2年次には「国際ジュウリーアート展」に入選している。3年次には、ドイツ留学経験を持つ担任がつき、雑誌をとおしてドイツのジュエリーに強い印象を受けた。人間の肉体をベースに、身に着ける金属に新しい表現を吹き込むオットー・クンツリ氏（1948～）などに影響を受け、身体を基礎とした表現への関心を深めていった。在学中に南青山で展覧会を開くなど活躍し、ジュエリーに使われたことのない素材や形について探究していたという。

身体への興味から、教師にデッサンを勧められ、2年次に1カ月、甲府の受験予備校である斉藤美術研究所にも通ったという（同所は、美術大学等への進学を目指す学生が実技指導を受ける予備校ではあるが、作家として活動する人材も多数輩出している）。ここで木炭デッサンを行うものの、消しゴムとして使うパンに生えたカビの美しさに感動したといい、学校の外でも素材の本来の美に惹かれるという体験をしている。

1984（昭和59）年、東京都世田谷区に転居し、金属加工の仕事に就いた。ジュエリー・デザイナーの岩倉康二氏（1926～）の工房「スタジオビス」に入るも、数カ月後の夏には山手線の車内で気胸を発症、救急搬送され数日入院する事態となる。そのほか神経痛などさまざまな体の不調にも見舞われ、結局1年で退職することになった。しかしここで、のちに結婚する妻・小松かず子と出会っている。武蔵野美術大学で金属工芸を学んだかず子は、職場の先輩であり、栗田の制作においても重要なパートナーとして

伴走する存在となる。また、同年のクリスマスに、西武美術館で開催された「Music in Museum 展」をかず子とともに訪れ、長きに渡り親交を結ぶことになる高橋睦郎氏（1937～）と出会う（註3）。現代音楽のコンサートとも言えるイベントで、音楽家の一柳慧氏（1933～）のパフォーマンスが行われており、10名ほどの演奏者の一人として高橋氏も参加していた。演奏者は自身の仕事における基本動作を繰り返せ、という楽譜のみを受け取っており、高橋氏は扇子に「あ」という文字のみを書き付け続けていたという。曲が終わり扇子を会場に投げたが、栗田がそれを拾ったという。自宅が近かったことから自分の作品《Contact with Nature》の写真（写真1）（註4）の一部にジョン・ケージ（1912～1992）の言葉「Happy New Ear」を添えた年賀状を出すと、すぐに返事が届き、高橋氏の家を訪れることとなった。その後数回高橋宅を訪れ、高橋氏が逗子に転居した後も関係が継続することになる。

この年は、故郷・山梨に多く残る習俗として栗田の大きな源となる「丸石神」を再認識した時でもあった。「丸石神」は、もとは自然に丸くなった石を、家の敷地内におく屋敷神や集落の辻などにおく道祖神などとして祀ったもので、そのルーツは縄文時代に遡る。古本屋で、堀慎吉が編集を担った『丸石神』（木耳社、1980年刊）を手にし、栗田は大きな衝撃を受け、山梨で当たり前のように目にしていた丸石の道祖神を改めて認識することになった。後年、堀自身とも知り合うことになる。



写真1

身体表現との出会い

1984年当時、体調を崩し左半身が一時期不自由となり、自分の身体に対する自信を失ったものの、それ故にこそ自分の内にあるものを見つめようとする姿勢が生まれたと考えられる。アンドレイ・タルコフスキー（1932～1986）の映画や、ヨーゼフ・ボイス（1921～1986）の同年の来日を含めたさまざまな美術展、現代音楽などの芸術表現に触れつつ自身の表現を模索する中で、1985（昭和60）年2月に土方巽（1928～1986）の『衰弱体の採集』の講演を聞く機会を得、舞踏と出会う。これを機に、自身も身体表現を試み始め、福原哲郎氏の稽古場に半年ほど通った。同年の5月から夏にかけて、週末に東京から山梨に戻って来ては、森の中で身体を投げ出し、人間の肉体も石や土、木や草花と同じ物質であることを確認する行為を繰り返した。自分の身体を自然に溶け込ませるイメージを描きつつのパフォーマンスであった。そしてしっかりと写真に残すべく、写真家の青柳茂氏（1950～）に撮影を依頼した（註5）。土曜日の夜に青柳氏とディスカッションをし、日曜日に敷島町（現、甲斐市）の観音峠付近の森に入り、森の時間やリズムと栗田のそれとが一致したと感じた瞬間だけ撮影するように打ち合わせたという。当初は記録のための撮影であったが、青柳氏の写真が栗田の表現と呼応し合う共同制作となり、のちに《Being on the Earth》と名付けられた（口絵1）。また、このパフォーマンスのため毎週末に帰省する度に、『丸石神』を片手に記憶を辿り、故郷の「丸石神」を巡ることも行っていた。

このパフォーマンスに先立つ3月には「スタジオビス」を退職し、4月から『月刊ジュエリー』を出す出版社ジュエリージャーナルに就職、季刊の『宝石の四季』の編集に携わるようになった。アートの紹介に特化したページをつくるなど約2年意欲的に取り組み、アーティストとの連携なども行った。この仕事においてドイツ人アーティストのイングリッド・ホイザー氏（1947～）と知り合う。ホイザー氏は神奈川県逗子市に居住し、逗子の海岸に漂着するものでオブジェを制作していた。高橋睦郎氏もこの頃逗子に転居しており、1986（昭和



写真2

61) 年3月、栗田もまた逗子に居を移す。この転居には、海のない山梨で生まれ育ったことも関係していたという。森の中での身体表現において自然と一体化するような感覚を得ようとしていた栗田にとって、潮の満ち引きというより大きな自然の力が働く場は魅力的なものであった。転居ののち、9月には《椰子の実》と名付けたパフォーマンスを行った(口絵2)(写真2)。満月の時には大潮のため干満差が2mにもなる。潮が引いた浜に立ち、やがて潮が満ちて来るのを待つ。潮の流れに身を任せ、波に洗われて漂い、立ち上がった時点で終了というものであったという。月の引力が物体を動かす力となって身体に影響することを感じるための行為であり、森から流れ出た水が海に注ぐように、浜辺という新たな場で身体と自然物とが混ざり合うことを思い描いていたものであった。

インドへの旅、「収集」のはじまり

1986年11月、雑誌編集の仕事を辞め、栗田はかず子とともにインドへと旅立った。アートの特集を組むなど新しい試みをしていいた中で、担当記事へのクレームがきっかけで営業への異動命令を受け、これに反発して辞職しており、まったく異なる世界を経験することを目指しての旅であった。実際、この旅は栗田の価値観を大きく変えることになるが、むしろそれまで抱いていた感覚をより鋭敏に研ぎ澄ます経験になったと考えられる。バックパッカーとして自分の肉体のみを頼りにしながらも、水分を失うとすぐに干からびてしまう過酷な旅において、人間の体も道端の石や砂粒と変わらない物質であるという感覚を持ったという。この旅で、靴底の裏に挟まった小石を一日の終わりにはずし、捨てずに持ち続けた。1986年11月24日から87年1月12日まで(挟まらなかった日もあり)の石が貼り付けられた《Foot Path》(写真3)は、自分と旅をともにした石を集めるという、その後の栗田の制作手法である採集に結びついている。土を集める際にも、自ら足を運んだ土地の土でなければならず、その地に屈みこみ手作業で少量すくうということをルールとしているが、自分の身体の延長線上に土があるという考え方は、靴底の小石の採集にその萌芽を見出すことができるだろう。

また、1986年12月8日付けの36枚のネガフィルム写真が残されている(写真4)。インドで地平線の写真を撮ろうと持参した一眼レフカメラをたった一度取り出した機会に、自分の足が、地面の盛り上がりや枝、木、動物の糞、鳥の羽などを前にした様子を撮影したものである。足は素足で写されており、自然の物体と自分の肉体がさほど変わらない物質であることへの意識を端的に伝えるものと言えるだろう。

1年間のパフォーマンスと次なる旅

1987(昭和62)年の1月に帰国すると、その後1年間、再び逗子海岸でのパフォーマンスを開始し、継続的に実施した。《旅の途中のひとつの街》と題されたが、これは旅の日記をまとめた私家版の著書のタイトルでもある。インドへの旅の前後のパフォーマンス含め、全体が一続きであるとい

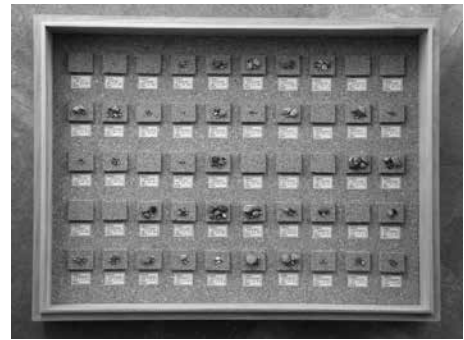


写真3



写真4



写真5-1



写真5-2

う感覚から、帰国後のパフォーマンスのタイトルを著書にも冠したという（註6）。パフォーマンスは満月の時期に開催され、舞踏家や音楽家も参加した。前年の海岸での行為は自身と海との間で成立するものという性格が強かったが、この年のパフォーマンスは他の出演者との公演であり、観客が見守る中で行われた（写真5-1,2）。この頃、舞踏家の吉田光雄（1938～2001）と知り合い、九州在住の吉田と手紙のやり取りをしながら稽古を受けた。翌88年4月、吉田が逗子海岸でのパフォーマンスの休演前最後の公演を観に訪れ、東京で相舞会《未来からの風》を行った。その後、今度は栗田が吉田を訪ね、福岡でやはり相舞会を行った。吉田の人間の悲しみや苦しみを含みこんだ踊りと人間性は栗田にとって非常に重要な指針となっている。

相舞会からはどなく、栗田は再びアジアへの旅に出た。神戸から海路で中国へ渡り、タクラマカン砂漠を横断し、パキスタン、インドへと至った。東南アジアに滞在したのち、西アジアへ飛び、トルコ、エジプト、ギリシャまで足をのばす500日の旅となった。この旅では、いくつかの土地で2か月滞在するなど、現地の人と交流した。また、訪れた土地の土を貼ったポストカードを、山梨の自宅にあてて投函した。《PIECES OF THE EARTH》（写真6）とのちに題されたこのポストカードは、2002（平成14）年の旅まで断続的に続けられた。記載された日付を追っていくと数日から1週間程度のひらきがあり、訪れた土地ごとの滞在日数は変わるが、土は3つ、3か所分貼り付けたところで投函された。当初は旅の記憶として行っていたに過ぎなかったが、のちにこれが栗田のキャリアに転機をもたらすことになる。



写真6

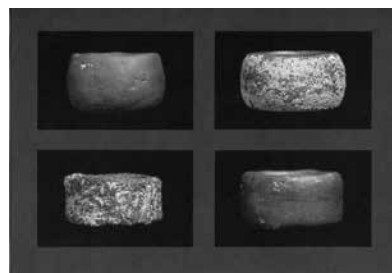


写真7

土との出会いへ

1989（平成元）年の9月に帰国すると、自宅の敷地内にある他界した祖母の離れに居住し始めた。和室一間に台所という簡素な部屋で、必要最低限のもので生活する暮らしは、無駄なものを持つことのない長い旅によってもたらされたと言える。帰国後、黒楽茶碗に興味を持ち始め、翌90年から焼き物のような風合いを持った、金属による小品の制作を始めた。これは金属に土や植物などを混ぜ溶融したもので、はじめは「景」と呼ぶ小さな輪を制作していた（写真7）。その表面は栗田が惹かれた黒の楽焼のような質感を持っており、こうした金属の小品は2000年代初めまで制作され、その過程で人型に変化していった（写真8、9）。

こうした作品は、石川県珠洲市中世につくられていた黒灰色の古陶・珠洲焼にも影響を受けており、90年8月には実際に奥能登を訪れた。ここで栗田は、能登半島の土が非常に豊かな色彩に富んでいることに気が付いた。土の面が露出している崖で、縞模様のように赤や黄色の土があらわになっていたのを目にしたという。土そのものに色があり、それだけで十分美しいということに気が付くきっかけであった。この後は、自宅の庭での焚き火で土器を焼くことにも取り組み、土を素材とした作品制作も行ったが、土自体を、人の手を加えることなく提示する手法に至るのは約3年後の1993（平成5）年、日本橋のギャラリー・トモスでの個展の時となる。

90年初頭、栗田にとってもう一つの大きな出会いがあった。カメラマンの青柳氏が堀慎吉とともに仕事をしたことから、堀に栗田を紹介したのである。小梅の収穫時期に山梨市の堀宅を訪れ、その後堀が笛吹市に転居す



写真8



写真9

ると、そちらにも通い、野焼きによる土偶づくりなどを手伝ったという。堀は1980年代から土を用いた作品制作を行っていた。栗田が堀の作品を目にするのは2000年の個展の時であったが、この時期は栗田も自宅で土器をつくっており、その制作にも影響を受けた。

1990（平成2）年9月から半年間、今度はタイ、スリランカ、インドと仏教の国々を回る旅に出た。この旅では、ブッタガヤの菩提樹の下のような聖地や、巡礼の人々が通る道々、メコン河やインダス河のほとりで、小石を拾い続けた（註7）。最初の旅でも小石を集めたが、この旅での行為は、石というものの存在を明確に意識した上での採集であったと言えるだろう。つまり、石には自然の力だけではなく、訪れた土地のさまざまなものが含まれ、詰まるところそこに生きる人々の生死が宿っている、とする感覚である。これは、のちの土採集にも通じる点である。土の色がすべて異なり美しいということだけではなく、その土地に生きる人間が大地と関わってきた歴史があること、土にはその身体すら含まれている可能性があること、これが重要な点であり、小石の採集はその先駆けであったと言える。1991（平成3）年3月の帰国後、石の採集は《POYA DAY》（写真10-1,2）というかたちへと結びつく。満月の日に小石を拾うというパフォーマンスと採集とが一体となった作品だが、ほぼ毎月1回、20世紀末までの108夜を企図して開始された（実際には108個で終わることなく現在も続き、額にして11、2022年1月末時点で381個ある）。逗子海岸でのパフォーマンス同様、月という自然の大きな力を自分の身体と接続させる試みであり、ここでも自然と身体という点が共通している。



写真10-1



写真10-2

1990-91年の旅の途上でも《PIECES OF THE EARTH》は継続されたが、帰国した栗田を訪ねた堀は、このポストカードを目にし「アートだ」と言ったという。堀の勧めによってギャラリー・トモスで1991年11月に初めての個展「Being on the Earth」が開催されることとなり、季刊『アート』誌上には堀による論考「魂のスーパーニール＝栗田宏一の世界」が発表された。個展ではポストカード13枚と1988-89年の旅で拾った72個の石、ブッタガヤで拾った36個の石を円形に貼りつけた作品《Seeds of Peace》が展示された。さらに、翌年3月にはやはりギャラリー・トモスで「罌」が開催された。これらの個展と堀の論考により、海岸でパフォーマンスをする舞踏家、あるいは金属や土器の作家と認知されていた栗田は、身体、旅、採集といった複数の要素を併せ持つアーティストとして紹介されたのである。

聖と俗

1991年の12月、栗田は再びタイへ渡り、バングラデシュ、ネパールへ足をのばし、翌92（平成4）年の3月に帰国した。この旅でも、聖地とされる土地の石を拾っている。この年から翌93（平成5）年にかけては、国内の仏教遺跡や縄文時代の遺跡、四国八十八箇所、東北地方の霊場などを精力的に回った。仏教の国々への旅を経て、今度は国内の仏教の聖地に目を向けることとなり、各地で石や砂を採集した。また、破損した仏像や朽ちた鉄釘などから、時の経過によって変化しながらも変わらない強さを持った造形物に関心を寄せた。金属の溶融の作品で人型の小品が生まれたのもこの頃である。

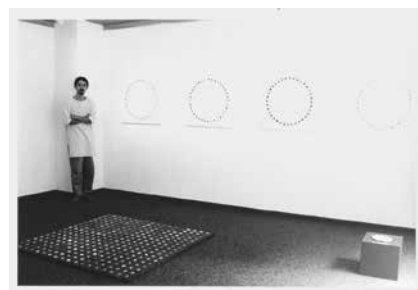


写真11

1993年9月にはギャラリー・トモスで三度目の個展を開催するが、この時に、土そのものを初めて展示した（写真11）。1.8㎡の台の上に、円錐形に盛られた土が載せられている（写真12）。すべて山梨県で採集した土であり、展示の最後にははき集め、再び土に戻すことをコンセプトにしていた（写真13、

14)。1990年に能登半島で土に「出会って」から、この年に改めて足元の土の色の多彩さに気が付き、それを土だけのインスタレーションにするという展開を発表するに至った。

この個展には、91年の初個展の際にも1点出品された《Seeds of Peace》4点のほか、四国八十八箇所の各札所で拾った小石88個も展示された。どちらの作品も聖地とされる土地あるいは巡礼の札所で拾った石が用いられており、この頃の小石の採集は、宗教的に重要な場所を重んじ選ばれている。一方の土は、山梨県内の324の土が展示されている。いずれも宗教的な意味合いがある土地が選定されたのではなく、まさに身近な足元の土が一つひとつ全く異なることを、土それぞれの比較によって可視化したと言える。

この当時、「採集」という点では同じでも、栗田の中で、石と土とが違う意味を与えられていた部分もあったと考えられる。本個展に展示された小石は聖地から拾った聖なるものであり、36は煩悩の数（過去、現在、未来の 3×36 で108）を表していた。1つずつ拾う石は、栗田という個と石とが向き合うものである。古来の流れを受け継ぐ「丸石神」を重んじることからも、石は、ある種の呪術的な力を持った存在として受け止められていた（註8）。一方の土は、人と人との向き合う茶室のサイズの2畳の場に設置されており、身近なところから拾った俗なるものであった。個展会場という1つの空間の中に、「聖」と「俗」のバランスを取ることが意図されていたのである。石の採集はその後も続けられるが、1991年に開始された《POYA DAY》という、人の力を超えた月との関わりの中で石を拾う行為に集約されていく。「聖」としての石、すなわち聖地にこだわって石を採集することからは離れるものの、たった1つの石を拾うという行為には、土に対するのとは異なる石との向き合いがある。

土をめぐることは、しばらく採集と並行して土器づくり等も行われるが、この過程については、金属や土器などの人手に渡り残る作品と、公の場に出され、所有できず残すこともできない土のインスタレーションとのバランスを取る意識もあったという。インスタレーションは、1996（平成8）年に再びギャラリー・トモスで北陸の土を見せるという展示を経たのち、翌97年に京都の法然院での展覧会「土の散華」で全国の土を並べるという新たな段階を迎えることになった。身近なところで採集する土は、人の集団、人間の暮らしとの結びつきこそが重要であり、栗田もまたその集団の一員として土を採集する。日本で生まれた人は誰でも、自分の生まれた地の土を見ることができるようにとの思いから、すべての市町村を回って土を集めることが目指され、2000（平成12）年からは、土採集のフィールドワークと発表という仕事のみに集中することになる。

おわりに

2000年以降、およそ20年間《ソイル・ライブラリー》に取り組んだ栗田は、2017（平成29）年に日本全国の旧市町村3,233の、数にして35,000を超える土を集めるに至った。そのキャリアの初期を見渡せば、制作の根底となる考えはほぼ一貫しており、別々の発表形態にも共通する点を見出すことができる。それは、自分の身体を基本とし自然のものと向き合うこと、人間もまた自然と変わらない存在であるという考えである。生身の肉体という物質をまとった人間を、自然界のその他の生命・非生命と同等に捉える見方とも言える。それゆえにこそ、物質としての人間の肉体が含み込まれた各地の土が、多種多彩な色を有しているということ以上に重要視されている。膨大な土を集めること、それはすなわちその数だけ、その土地の人間に思いを寄せることであり、栗田は土をとおして人間を見ているに他ならない。

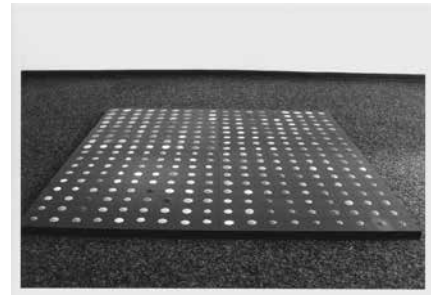


写真12



写真13



写真14

そして栗田は、あらゆるものが詰まった自然物を代表する土に敬意をもって接する。土と対話し、余計な手を加えず、本来の姿を見せるという手法は、身近でありながらも尊い存在を扱うという自覚に支えられている。自然界のすべてを包括する土を《ソイル・ライブラリー》として残す時、むしろ作家としての個の名前は消え、すべての人に開かれた作品であることが構想されている。栗田宏一が土と「出会った」ように、多くの人が土に「出会う」という望みが託されているのである。

(山梨県立美術館 学芸員)

註

- 1 堀慎吉「魂のスーパーニール=栗田宏一の世界」『アート' 91』マリア書房、1991年10月、pp.66-73
- 2 「いのちの土」『Booklet 22 コスモス』慶應義塾大学アート・センター、2014年、pp.78-93
このテキストがフランスで開催された栗田の個展の図録にも仏英訳され掲載された。
KÔICHI KURITA “vie_terre_vie”, *mille terres mille vies*, Abbaye Maubuisson, Val-d'Oise/ *Bibliothèque de terres: Île-de-France, Domaine de Chamarande, Essonne, France*, 2014, pp.124-149
また以下にも長文のインタビューが掲載されている。
「土を「愛でる」《気絶》した感性が解放される時……」『月刊 MOKU』2004年7月、pp.38-51
- 3 同展は、1976年から94年までの間に、年に1、2回、計15回開催された、クリスマスの時期のコンサートイベント。
年表「パフォーマンス、演劇、コンサート」美術館教育研究会 (artscape.ne.jp)
www.artscape.ne.jp/museum/nmp/artscape/educate/0010/edu_data.html
高橋睦郎氏は、2016年には栗田のフランスでの個展図録にテキスト（仏英訳掲載）を寄せ、その原文が2020年の山梨県立美術館特別展「栗田宏一・須田悦弘展」図録に掲載された。
TERRE LOIRE, Château de Chambord, Loir-et-Cher, France, 2016: Mutsuo Takahashi, “Reprendre contact avec le sol à l'exemple de Kôichi Kurita”, pp.17-25
『栗田宏一・須田悦弘展 —Contentment in the details—』山梨県立美術館、2020年：高橋睦郎「足もとから 栗田宏一に準（なら）う」pp.10-11
- 4 1984年に制作した《Contact with Nature》は、グラスファイバー製の模造石の裏側に、中央に丸い穴を開けたステンレスの板を貼ったもので、耳を当てて石の声を聞くというコンセプトの作品。石と3枚の写真でセットの作品であったという。本作については以下で栗田と伊藤一廣（1948～1997）の対談が組まれた。
『ジュエリースタイルング』柏書店松原、1984年、pp.86-91
- 5 青柳氏に写真を依頼したのは、《Stone Garden》（写真）という作品の撮影依頼が初めてであったという。学生時代の最後、1984年に制作していた本作は、加工していない自然石の割れ目に金箔を挟み込んだもので、裏側には紐を通す金具が付いていた。自分の体を庭に見立て、そこに石が配置されているイメージで、（写真）は3点組みのうちの1点。1986年にミュンヘンで開催された展覧会「Jugend gestaltet」への招待を受け、出品時（1985年）に仕上げを行い、青柳氏が撮影した。この作品以降栗田自身が自分で何かを身に着けることはなく、自分の身体を森の中に置き、青柳氏がその様子を切り取ることとなった。
- 6 この時のパフォーマンスは、ホイザー氏のほか、舞踏家の岩名雅記（1945～2020）と栗田の3人で始めたが、タイトルを決めるにあたり、ホイザー氏の言葉から栗田が創作したという。そのタイトルを冠した自著『旅の途中のひとつの街』（写真）は、1986年、1988-89年、1990-91年、1991-92年の4回の海外への旅、1992（平成4）年の四国八十八箇所巡りなどの旅の日記を1996（平成8）年にまとめたもの。手書きでコピーし、1冊ずつ八十八箇所の札所の土を貼り、88部制作した。
- 7 聖地で拾った小石は、36個が円形に貼り付けられ額装されたシリーズ《Seeds of Peace》として作品化された。こののちも、中南米やアフリカなど各地を旅した際に、聖地で小石拾いを行い、シリーズは全部で12点制作された。その他、1986（昭和61）年から2002（平成14）年まで、聖地ではないが旅した各地での小石採集も行



《Stone Garden》
（「1986 Jugend gestaltet」展図録
p.78より転載）



《旅の途中のひとつの街》

われた。294 個の石が 20 の額装作品《Passed Towns》として残されている。

- 8 栗田は、山梨に残る丸石神が、もとは自然に丸くなった石を神として祀っていることを西洋の文化と比較し「でも日本の場合は、石の中に神を見たならノミを当てません。ありのままの美しさとか尊さを大切にする文化があります。」と石に対する敬意を語っており、そこには畏怖の念も込められている。ありのままを大切にするという姿勢は、採集した土に色を付けるなどの加工を施すのではなく、ゴミを取り除き本来の色を見せるという手法を取ることに引き継がれている。

『栗田宏一・須田悦弘展 ―Contentment in the details―』山梨県立美術館、2020 年：「栗田宏一インタビュー」 p.97

写真提供

写真 6、10：青柳茂

本稿は、栗田宏一氏へのインタビュー、メールのやり取り、資料提供を受けて執筆した。栗田氏に記して感謝申し上げる。

研究ノート

医療従事者に対する美術館の役割 ―北米の事例を中心に―

下東 佳那

はじめに

芸術が心身にもたらす効果は長年研究、実践されてきたが（註1）、近年においては治療（キュア）やケアを受ける側だけでなく、医療等を提供する側が芸術に触れることで得られる効果が報告されている。その背景には、医療の科学的進歩が急速に発達する一方、医療と人文の溝がどんどん広がっているという懸念が20世紀後半から上がってきており、その結果、珍しい検査や治療方法への過剰な依存や、医師の燃え尽き症候群が頻発しているとされる。また医療を受ける側は、医療の進歩そのものには信頼はおきながらも、医師が患者を第一に考えていないように感じるケースが多いとの報告もある。（註2）

そのような中、医療従事者の養成などに芸術を応用することを「医療人文学（medical humanities）」と呼ぶ。（註3）中でも医学部や医療機関が近隣の美術館と連携して開発した、医学生等を対象としたプログラムが北米を中心に多数ある。これらのプログラムは美術作品鑑賞をとおして観察力の向上、エンパシー（共感力）の促進、リフレクション（内省）の助長、チームワークの育成などの効果を目的としている。本稿ではハーバード大学医学大学院や同大付属ブリガム・アンド・ウィメンズ病院で開発および実践されてきたプログラムを中心に上げ、美術館の新たな役割を探る。

Training the Eye (TTE) プログラム

ハーバード大学医学大学院で2003年から設けられてきた「Training the Eye: Improving the Art of Physical Diagnosis」（目を訓練する：フィジカル診断の技術向上を目指して、以下「TTE」）は、主に初年度の学生を対象としたプログラムで、ミュージアム・エデュケーター（註4）とのコラボレーションで開発された。プログラムの目的は、身体検査で重要な観察力、描写力、分析力を向上させ、患者の診察で使う視覚的およびコミュニケーション能力に対する自信をつけ、医療チーム内で働くときのようなグループでの作業の機会を設けることである。実際5つの項目（観察力〔observations〕、複数の解釈を導き出すための理論的思考力〔speculative thinking to generate multiple interpretations〕、証拠に裏付けされた解釈力〔interpretations supported by evidence〕、陰性所見への意識〔awareness of absence of observations〔pertinent negatives〕〕、色彩や陰影などの美術と関係する概念の活用〔use of fine art concepts〕）において、プログラム受講者と非受講者で比較した場合、受講者の方がより良い成績を残したという結果が出ている。（註5）プログラムの実施場所の大半は近隣のボストン美術館の展示室内で、実際の作品を鑑賞しながら実施されている。

プログラム内容と教材となった作品の事例をいくつか取り上げる。例えば胸部放射線イメージングの輪郭を読み解く能力の向上にはパブロ・ピカソの分析的キュビズム期の作品《女性の肖像》（1910年）、皮膚科学上の診断における質感とパターンの認識力向上のためにはジャクソン・ポロックのドリップ・ペインティング《ナンバー10》（1949年）が用いられている。また、脳神経の診察における線と左右対称性を見る能力向上には19世紀アメリカのフォークアーティストであったスーザン・キャサリン・ムーア・ウォーターズの作品で、三人の女兒が左右対称を成すように表されている《リンカーン家の子どもたち》（1845年）、神経学的診察における均衡と不均衡を察知する能力向上にはクロード・モネ《ラ・ジャポネーズ》が使われている。（註6、7）医学的教育と繋がるよう、綿密に選定された作品の鑑賞をとおして、受講者が医師として必要な観察眼を養うことを本プログラムでは目指している。

ブリガム・アンド・ウィメンズ病院内科人文カリキュラム

TTEが主に医学生の観察力向上を目的としたのに対して、ブリガム・アンド・ウィメンズ病院のインターン（研修医）（註8）のために始まった内科人文カリキュラム（BWH Internal Medicine Residency

Humanistic Curriculum) は、レジデントの心身の健康（ウェルビーイング）と人間性の資質を養うと共に、燃え尽き症候群を予防することを目的としている。本カリキュラムではディスカッションなどの他、アート・エデュケーターと医学教育者によって開発された、ボストン美術館内で行われる「美術館での一夜（Night at the Museum of Fine Arts）」が課せられる。

「美術館での一夜」の内容の事例をいくつか挙げる。（註9）「意味と比喩（Meanings and Metaphors）」のセッションにおいては、選定された作品を前に、その作品が研修医生活とどのように関連付けられるかを考える。例えばこのセッションのために、ジョン・シングルトン・コプリー《ワトソンと鯨》（1778年）が選ばれたことがある。本作では小さな船に乗った乗組員が、大きく口を開けた鯨に襲われる様子が表されている。水中には裸の人物が右手を挙げて必死に助けを求め、それに応えようとする人もいれば、奥で恐怖に怯える者や、状況を見守ることしかできない者、また長い棒で突き刺そうと果敢に鯨に立ち向かう者が描かれる。1749年に実際に起きた出来事取材した本作が選ばれた理由として、インターンは描かれたどの人物（あるいは鯨自体）にも自らを投影することができるからである。また「苦しい会話：死と死にゆくこと（Difficult Conversations: Death and Dying）」のセッションにおいては、サルコファガス（石棺）を鑑賞し、死を迎えようとしている患者のケアをした時の経験を内省するよう促される。（註10）そして「瞑想とセルフケア（Meditation and Self-Care）」においては、仏教寺院を模した空間の中でリラックスするための瞑想を行う。本プログラムは内省を促すのみならず、美術作品の前では医療現場内のヒエラルキーがある程度無効となることから、グループワークなどをとおして上下関係を越えた交流の機会にもなるといえる。実際ペアワークをする際は意図的に先輩と後輩が組むよう、設計されている。（註11）

VTS の応用について

上記で取り上げた二つのプログラムが Visual Thinking Strategies（VTs）（註12）を元に開発されたということは特筆に値するだろう。VTs とは認知心理学者のアビゲイル・ハウゼン氏とニューヨーク近代美術館でエデュケーション部門部長を務めたフィリップ・ヤノウィン氏が1990年代に開発した探求型鑑賞方法で、ファシリテーターが「この絵の中では何が起きていますか？」「どうしてそのように感じますか？」「他に何が起きていますか？」といった質問を鑑賞者に投げかけることで成立する。ここではVTsについて詳しくは述べないが、その方法が美術館や一般の学校現場のみならず、医療の教育現場でも使用されていることは興味深い。（註13）

ハーバード大学系列以外の事例

上記ではハーバード大学系列の事例を中心に挙げたが、このような取り組みを行っている大学や美術館は他にも多くある。（註14）北米における他の例には、ペンシルベニア大学医学大学院とフィラデルフィア美術館の連携（註15）、ブラウン大学医学大学院の「Creative Medicine Series」（註16）、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン・ミュージアムのプログラム「Clinical Arts」（註17）、ペンシルベニア美術アカデミーの「Art and Medicine Programs」などが挙げられる。

また医療従事者のみならず、警察官を含めた美術鑑賞プログラムが実施されていることも特筆に値する。ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン・ミュージアムで行われるプログラム「Cops, Docs and Outreach Ops（警察と医師とアウトリーチワーカー）」は、医療従事者同様に観察眼が重視される警察官やアウトリーチワーカーを対象にしており（註18）、メトロポリタン美術館では警察官に限定したプログラムも行われている。（註19）

あとがき

2020年から猛威を振るう新型コロナウイルスは世界中に大きな影響を与えている。当館もその例外ではなく、感染防止対策として2020年2月末から3か月間の展示室休室（および休館）、翌年の8月からも1か月ほどの休館をし、本稿を執筆する2022年3月現在においても多くのイベントが中止や延期となっている。感染者数が急増し、医療のひっ迫が訴えられる中、筆者は危機の中での自分の非力を思いながら、

美術館という場所や芸術全般の意義を改めて考えざるを得なかった。

本稿で取り上げた事例は美術館と医療従事者という限定的なものだが、美術館が文化、観光、娯楽といった役割以外のものを担う能力をもっていることを示唆する。国内においても美術と医療従事者の関係に対する関心が高まる中（註 20）、本稿が当館および日本の美術館の今後の一助になれば幸いである。

註

- 1 研究発表の一例として、世界保健機関（WHO）が 2019 年、芸術と心身の健康の関係性をまとめた報告書が挙げられる。Fancourt, Daisy; Finn, Saoirse; “What is the evidence on the role of the arts in improving health and well-being? A scoping review”, *Health Evidence Network Synthesis Report* 67, 2019. (<https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/329834/9789289054553-eng.pdf>)
- 2 Katz, Joel T.; Khoshbin Shahram, “Can Visual Arts Training Improve Physician Performance?”, *Transactions of the American Clinical and Climatological Association*, vol.125, 2014. (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC4112699/>)
- 3 medical humanities の和訳については足立智孝「Medical Humanities 教育について—登場背景と教育内容」Bioethics Study Network, vol.8.1, 2009, 脚注 2 参照 (<https://bioethics-s-n.up.seesaa.net/image/BSN-8A1CAC2ADCEA9C3D2B9A7A1CB.pdf>)。
- 4 アレクサ・ミラー氏（Arts Practica 代表）、ジュディ・マリー氏（当時ハーバード美術館群エディター）
- 5 Naghshineh, Sheila; Hafler, Janet P.; Miller, Alexa R.; Blanco, Maria A.; Lipsitz, Stuart R.; Dubroff, Rachel P.; Khoshbin Shahram; Katz, Joel T., “Formal Art Observation Training Improves Medical Students’ Visual Diagnostic Skills”, *Journal of General Internal Medicine*, July 2008. (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2517949/>)
ただし、上記でも指摘があるように、受講前と受講後という短期間での効果は認められたものの、長期間での効果に対する研究はなされていない。
- 6 前掲参照。なお、この段落で取り上げた絵画作品は全てボストン美術館の所蔵で、同館 HP 上の収蔵品検索システムで画像を見ることができる。
- 7 その他の例としては下記のようなものが挙げられる。角度によって見え方が変わる石彫を鑑賞した後、呼吸器系の患者を様々な姿勢から観察し、問題が筋肉、脊椎、肺あるいはその他の部位にあるかを判断する授業や、ジブシーの踊り子を描いたジョン・シンガー・サージエント《エル・ハレオ》1882 年、（イザベラ・スチュアート・ガードナー美術館蔵）を鑑賞した後、歩行に問題のある患者の均衡、足の位置、歩き方を評価するものなどがある。Khullar, Dhruv, “What Doctors Can Learn From Looking At Art”, *The New York Times*, December 22, 2016. (<https://www.nytimes.com/2016/12/22/well/live/what-doctors-can-learn-from-looking-at-art.html#:~:text=Art%20can%20also%20help%20doctors,emotional%20expressions%20on%20patients%27%20faces.>) 参照。
- 8 「研修医」「インターン」などの使い分けについては Teo, Alan、青木昭子、後藤英司「『研修医』、『レジデント』、『インターン』の使い分けについて」医学教育、39(1)、2007 参照。(https://www.jstage.jst.go.jp/article/mededjapan1970/39/1/39_1_47/_pdf)
- 9 註 2 同掲書参照。
- 10 夫婦が抱き合った姿が刻まれた、紀元前 350-300 年に制作された古代エトルリアのサルコファガスを鑑賞した際には、五十年連れ添った妻が癌で亡くなることをある男性に伝えなければならなかった時に、自分がその役に不適格であると感じたことなどが語られたという。Blanding, Michael, “Museum Studies: Art unleashes emotions and discussion among new doctors”, *Harvard Medicine magazine*, Winter 2016. (<https://hms.harvard.edu/magazine/art-medicine/museum-studies>)
- 11 “Mass. Doctors get lesson in art to improve patient care”, CBS NEWS, January 21, 2016. (<https://www.cbsnews.com/news/boston-brigham-and-womens-hospital-museum-of-fine-arts-improve-medical-practice-patient-relationship/>)
- 12 日本では「対話型鑑賞」という用語が同義で使われることがある。
- 13 VTS の歴史や応用方法については Yenawine, Philip, *Visual Thinking Strategies: Using Art to Deepen Across School Disciplines*, Harvard Education Press, Cambridge MS, 2013.（日本語訳：フィリップ・ヤノウィン著、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳『学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ：どこからそう思う？』、淡交社、2015 年）参照。VTS の元となったハウゼン氏の美的思考研究については Housen, Abigail, *Eye of the Beholder: Research, Theory and Practice*, 1999 (<http://vtshome.org/wp-content/uploads/2016/08/Eye-of-the-Beholder.pdf>) 参照。NPO としての VTS については <https://vtshome.org/> 参照。

- 14 実際 TTE の開発を促したのは、美術鑑賞が皮膚学科学生 の能力向上を助けたというイエール大学の研究である。Dolev JC, Friedlaender LK, Braverman IM, “Use of Fine Art to Enhance Visual Diagnostic Skills”, *JAMA*, September 2001, 286, 1020-1021.
- 15 Perelman School of Medicine at the University of Pennsylvania, *An Artful Approach to Medicine*, Association of American Medical Colleges. (<https://students-residents.aamc.org/applying-medical-school/artful-approach-medicine>)
- 16 <https://www.brown.edu/academics/medical/education/other-programs/clinical-arts-humanities/creative-medicine-series> 参照。また同大学は MOOC (大規模公開オンライン講座) の edx においてオンライン講座「Artful Medicine: Art’s Power to Enrich Patient Care (アートフルな医療：患者ケアを養うアートの力)」を提供しており、誰でも無料で受講することができる。
- 17 <https://risdmuseum.org/clinical-arts>
- 18 Naylor, Donita, “Cops, Docs & Outreach Ops”, *The Providence Journal*, March 29, 2018.
(<https://www.providencejournal.com/story/news/2018/03/30/cops-docs-amp-outreach-ops-seeing-art-through-others-eyes/12877302007/>)
- 19 Sarah Lyall, “Off the Beat and Into a Museum: Art Helps Police Officers Learn to Look”, *The New York Times*, April 26, 2016.
(<https://www.nytimes.com/2016/04/27/arts/design/art-helps-police-officers-learn-to-look.html>)
- 20 福のりこ、伊達隆洋、森永康平対談「アートの視点がこれからの医学教育を変える？座談会 対話型鑑賞で鍛える『みる』力」、週刊医学界新聞、第 3379 号、2020 年 7 月 13 日。
(https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2020/PA03379_01)

「みんなでつくる美術館」の20年を振り返って

雨宮 千鶴

はじめに

本稿では、参加型事業「みんなでつくる美術館」（以下、「みなび」）が、2002（平成14）年度にスタートしてから今年度で20年となったことを節目に、当初の理念を確認し、20年間の本事業を4期に分けて振り返る。そして当館の教育普及において果たしてきた役割を検証し、最後に現在の状況や今後の展望を述べて結びとする。

「みなび」以前

当館では、鑑賞と創作が合体したプログラムを1984（昭和59）年度から2001（平成13）年度にかけて下のとおり行ってきた。

- ・「感想文コンクール」＝1984（昭和59）年度～1987（昭和62）年度
- ・「作文コンクール」（「感想文コンクール」を名称変更し、「みつけて、みつめて、美術館」、「ミレーの絵をみて」などのテーマを設けて実施した事業）＝1988（昭和63）年度～1998（平成10）年度
- ・「ミレーを描く会」1988（昭和63）年度～1997（平成9）年度
- ・「詩と絵のコンクール」1999（平成11）年度～2001（平成13）年度

最後の「詩と絵のコンクール」は、まず小中学生から自由なテーマで詩を募集して選考し、次に選ばれた詩の内容や雰囲気にあった絵を再募集して選考する二段階形式をとるものであった。応募作品は、詩と絵の「新しい出会い」に触発されて、ユニークで多様な表現を特徴とするものが多かった。一方で、事業を継続する中、詩に絵を組み合わせることによる表現の束縛性・画一化が避けられないという問題が持ち上がり、子どもたちの創造性がより広がり、自由で多様な表現創作活動ができるような新しい事業を起こす必要が出てきた。また、コンクール形式をとっていることが当時の美術教育に合致しているのかどうか疑問視され、2001（平成13）年度までの計3回で終了することになった。新しい事業としては、詩と絵のコラボレーションというスタイルを残しながら、ワークショップなどを実施し、さまざまな人々と交流する中で刺激を与え合いながら、新しい創造へとつなげられるような形にしたいと考えた。

「みなび」の誕生

—「詩と絵のコンクール」から「みなび」へ—

当館の事業と考え方・方法が似ている活動として、山梨県の実業作家・団野雅子（註1）氏の主宰団体「詩と絵のコラボレーション・プロジェクト」が実施している「詩と絵のコラボレーション展」（註2）があった。展示内容は、障がい者による作品、美術作家が制作した作品、公募による「詩」を組み合わせたものであった。団野氏は、自身の活動を継続する中で、障害の有無に関わらず美術を媒体に人々の交流を広げ、美術の楽しさ、豊かさを分かち合える活動にシフトしていきたいという考えに至り、美術館に共同運営を申し出た。当館としては、美術館の教育普及についての思いや、「詩と絵のコンクール」の基本的考え方に共通点を見出すことができる活動と協力することにより、「詩と絵のコンクール」以上に内容的に充実したものになると考えた。こうして2002（平成14）年度に「詩と絵のコラボレーション・プロジェクト」と共催という形で「みなび」が生まれた。

■第Ⅰ期 新たな試みのはじまり

「みんなでつくる美術館—あなたの・ことば・いろ・かたち—」

2002（平成14）年度～2006（平成18）年度

第Ⅰ期の特徴

「詩と絵のコラボレーション展」も「詩と絵のコンクール」のどちらも重点を置いていたのは個々が表現する「ことば」「いろ」「かたち」であった。それらをテーマに沿って幅広く興味ある人から作品を募集しコンクール形式ではなく応募作品のすべてを展示することとした。大人も子どもも、障がい者も健常者もプロもアマチュアも誰もが自由に参加し一緒に展覧会をつくっていく、今まで見たことがない「美術館」をつくりだそうと「みんなでつくる美術館」がスタートした。

第Ⅰ期の内容

(表1)

回	年月	テーマ	会場	事業内容		参加人数	ボランティア・スタッフ	主催	後援	協力	協賛	実行委員 ※※
				【作品展】	【ワークショップ】							
1	2002 (平成14)	たね	山梨県立美術館講堂 (現、県民ギャラリーC) (入場無料)	【作品展】 作品公募 『詩』86点(詩集・ミニパネル作成) 『平面作品』568点 (出品作家：井上麦、岩崎永人、遠藤享、富永泰雄、わたなべゆう) 【シンポジウム】 「上手い・下手って誰が決めるの？」 パネリスト：井上麦、北村真一、神野真吾、西村陽平、山本育夫	【ワークショップ】講師によるWS ・「障がい者について語る」木下長宏 ・「粘土でつくろう」建元稔 ・「種をもとに絵をつくろう」原恵美子 ・「詩をつくろう」山中八千代 ・「ぐるぐる描こう」藤崎昌彦 ・「音で遊ぼう」山本久美子 以上、会期中毎日1つ実施。 【詩と絵のコラボレーション】 インターネット上で全作品公開、詩と組み合わせて投票する仕組み。会場でも実施し、会期後、絵本作成。	1,538名	70名	山梨県立美術館 詩と絵のコラボレーション・プロジェクト	NHK 甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨新報 日本ネットワークサービス エフエム富士 エフエム甲府	遠藤享デザイン室 アート印刷株式会社 日本通運株式会社 (有)ディズブレイ遠藤九十製パン株式会社 アオヤギフォトスタジオ	山の都ふれあいコンサート 人ねっこ・アートワーク	美： 向山富士雄 (実行委員長) 神野真吾 三枝清美 雨宮千鶴 小田切武福・作： 団野雅子(副実行委員長) 教・福： 伊藤美輝
2	2003 (平成15)	樹	山梨県立美術館講堂 (現、県民ギャラリーC) (入場無料)	【作品展】 作品公募 『詩』30点(詩集・ミニパネル作成) 『平面・立体作品』 (2名以上の共同制作) 43点(出品作家：岩崎永人、遠藤享、窪田二、増田実、光島貴之、わたなべゆう)	【ワークショップ】講師によるWS ・「樹の形の絵本づくり／ポップアップボックス」伊藤美輝 ・「身近なものをつくろう」石田泰道・日川高等学校美術部 ・「粘土でつくろう」建元稔 ・「『さわる絵画』の公開制作、‘みる’こと、‘感じる’こと‘さわる’こと」光島貴之 ・「ぐるぐるえがく」団野雅子 「かえっこ、かえっこオークション」神野真吾 以上、会期中毎日1つ実施。 【詩と絵のコラボレーション】 第1回に同じ	2,602名	106名 延べ 196名	山梨県立美術館 詩と絵のコラボレーション・プロジェクト (この年より実行委員会形式となる)	NHK 甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨新報 日本ネットワークサービス エフエム富士 エフエム甲府	遠藤享デザイン室 アート印刷株式会社 日本通運株式会社 (有)ディズブレイ遠藤九十製パン株式会社 アオヤギフォトスタジオ 人ねっこ・アートワーク	山の都ふれあいコンサート	美： 向山富士雄 (実行委員長) 神野真吾 野尻あや子 雨宮千鶴 小田切武福・作： 団野雅子(副実行委員長) 教・福： 伊藤美輝
3	2004 (平成16)	もり・森・モリ・杜・・・	山梨県立美術館県民ギャラリーC、他 (入場無料)	【作品展】 作品公募 『詩』80点(詩集・ミニパネル作成) 『平面・立体作品』 (2名以上の共同制作) 62点 (出品作家：石田泰道、遠藤享、窪田子、笹井弘、団野雅子、光島貴之)	【ワークショップ】講師によるWS ・「きょうの森を感じて」「お山の杉の子～みんなで森をつくろう」伊藤美輝 ・「森で色を見つけよう」神野真吾 ・「松笠は未来のエネルギー Mr. ストロウ・動くクモ」笹井弘 ・「森の木は花いっぱい」窪田子 ・「みえない人と一緒にみる・みなびツアー 森を感じて表現しよう」光島貴之 ・「ドイツ・ベルリンから来た作家アレクサンドラさんとベルーさんと一緒に森をかこう」団野雅子 ・「もりもり大作戦」石田泰道・日川高等学校美術部 以上、会期中毎日1つ実施。 【詩と絵のコラボレーション】 第1回に同じ ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「積み木、パソコンでお絵かき、他」	3,729名	96名 延べ 232名 ボランティア 保険加入開始	山梨県立美術館 詩と絵のコラボレーション・プロジェクト	山梨県福祉協議会 NHK 甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨新報 日本ネットワークサービス エフエム富士 エフエム甲府	遠藤享デザイン室 アート印刷株式会社 日本通運株式会社 (有)ディズブレイ遠藤九十製パン株式会社 アオヤギフォトスタジオ わからず屋 商兵衛 べきん堂 画材シンプク みくに画材店	山の都ふれあいコンサート 人ねっこ・アートワーク アール・ブラッ 山梨メセナ協会	美： 向山富士雄 (実行委員長) 神野真吾 野尻あや子 雨宮千鶴 成澤玲子 福・作： 団野雅子 (副実行委員長) 教・福： 伊藤美輝 黒沢玲似子 教：小田切武 他：田中静男

4	2005 (平成17) 7月29日 (金) ～ 8月11日 (木)	つながり	山梨県立美術館県民ギャラリーC、他 (入場無料)	【作品展】 作品公募 『詩』33点(詩集・ミニパネル作成) 『平面・立体作品』 (2名以上の共同制作)44点 (出品作家：中込靖成、金子泰之、長坂佳子、林裕子、原倫太郎)	【ワークショップ】講師によるWS ・「リング・リング+つながカード」伊藤美輝 ・「音楽会ーハウルの動く城を題材に」長坂佳子 ・「音ってどんないろ？どんな形？」林裕子 ・「いろいろななまをあつめよう」駿台甲府高等学校美術デザイン科 ・「であう・びっくり・つながろう」団野組 ・「まほうの書」甲府西高等学校書道部 ・「色でつながるものがたり」成澤玲子 ・「しりとりにネットワーク」原倫太郎+プラグ ・「言葉の森でかけよう！」栗山由加、他 ・「サークルワーク」中込靖成以上、会期中毎日1つ実施。 【詩と絵のコラボレーション】 第1回に同じ ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「積み木、パソコンでお絵かき」	4,511名	133名 延べ 205名	山梨県立美術館 詩と絵のコラボレーション・プロジェクト	山梨県福祉協会 NHK甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨新報 日本ネットワーク サービス エフエム富士 エフエム甲府	遠藤享デザイン室 アート印刷株式会社 日本通運株式会社 (有)ディスプレイ遠藤 丸十製パン株式会社 アオヤギフォトスタジオ わからず屋 商兵衛 べきん堂 画材シンク みくに画材店 人ねっこ・アートワーク 団野組	山の都ふれあいコンサート 山梨メセナ協会	美：島田紀夫 (実行委員長) 神野真吾 向山富士雄 野尻あや子 雨宮千鶴 成澤玲子 福・作： 団野雅子 (副実行委員長) 教・福 伊藤美輝 黒沢玲似子 学：小田切武 他：田中静男
5	2006 (平成18) 7月26日 (水) ～ 8月6日 (日)	ひびき あう	山梨県立美術館県民ギャラリーC、他 (入場無料)	【作品展】 作品公募 『詩』33点(詩集・ミニパネル作成) 『平面・立体作品』 (2名以上の共同制作)44点 403人 (出品作家：開発好明、木村崇人) 【映画会】 「トントンギコギコ図工の時間」	【ワークショップ】講師によるWS 定員先着100名程度 ・「一人一人の心の色をつくり出そう！」早川利喜・NPO法人虹の谷 ・「書・美・音のひびきあい」甲府南高等学校書道部・美術部・音楽部 ・「音でひびきあう」山本久美子 ・「これは何色」栗山由加、他(山梨大学教育人間科学部) ・「ガリバーめがねで世界を見よう！」木村崇人 ・「みんなの電話」開発好明以上、会期中毎日1つ実施。 【詩と絵のコラボレーション】 第1回に同じ、美術館ホームページより接続可能 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「お絵かき広場、積み木」	7,696名	133名 延べ 205名	みなび実行委員会	山梨県福祉協会 NHK甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨新報 日本ネットワークサービス エフエム富士 エフエム甲府	ART BOX C.DESIGN アート印刷株式会社 日本通運株式会社 (有)ディスプレイ遠藤 丸十製パン株式会社 アオヤギフォトスタジオ わからず屋 商兵衛 べきん堂 画材シンク みくに画材店 人ねっこ・アートワーク 団野組(柳) 機山堂 甲信 梱包(株) 山梨大学教育人間科学部美術教育講座・芸術運営コース 山梨県造形教育研究会 山の都ふれあいコンサート		美：白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 雨宮千鶴 成澤玲子 高野直美 福・作： 団野雅子 (副実行委員長) 教・福： 伊藤美輝 黒沢玲似子 教： 神野真吾 小田切武 野尻あや子 市川知都里 井坂健一郎 他：田中静男

※「ワークショップタイトル」(実施場所／記載がない場合は美術館) 講師 参加者数の順 ・講師による WS は、約2時間
 ※※含む監事・事務局 美：美術館職員 教：教員 福：福祉関係 作：作家、ダンサー 学：学生 他：造形教室主宰、他美術館職員 協：美術館協力員 指：指定管理者

【展示】

その年のテーマをもとに多くの健常者(大人、子ども)と障がい者、そして美術作家(趣旨を理解し協力出品)の作品が同じ土俵の上に並べられた。美術館において誰もが自由に参加し美術作家と一緒に展示することは、美術館にとっては新たな試みであり、美術家にとっても新たなチャレンジや経験になったであろう。一般の人々はプロの作品と並列に展示されることに喜びを感じ生涯学習としてこれからの励みになったようである。また、小さい子どもや障がい者が制作した作品は、何ものにもとらわれない自由な精神やエネルギーを醸し出していた。募集した詩も、詩集や小パネルにし、来場者が好きな詩のパネルを手に取り、詩に合う作品の横に添えた。このようにすべての人の作品を展示することでより相乗効果が生まれ、作者も鑑賞者も楽しむ展示会場(写真1、3)になった。

募集作品は、初年度、予想以上に多数集まり、翌年より展示場所の関係から個人作品から共同制作にし、サイズも制限せざるを得なかった。

【ワークショップ・イベント】

ワークショップ（申込不要、定員なし／以下 WS）は、5年間で内容の多様化、参加者の増加（初年度は参加者が少なかったが、5年目には200名近いWSもあった）により充実してきた。当初WSは展示された作品に囲まれての実施であったが、美術館の改修とともに2004年から広いワークショップ室へ会場を移した。内容は、「みんな」が参加できることを前提に、毎回のテーマに関連した様々な表現技法や、触覚や聴覚など感覚への刺激から生まれるイメージを楽しむもの等を実施した。WSの指導者（講師）は、実行委員会から依頼し、出品作家にも作品の前で制作過程やイメージを披露してもらった（写真2）。時には、プロだけでなくアマチュアの障がい者を講師に迎えることもあり、高校生による企画WSも生まれた。単なる表現技法の伝達・体験ではなく人と人、人と画材・素材の関わりから、講師と参加者相互の「プロセスの共有と展開」が「みなび」におけるWSの特徴的な形態となった。ハンディキャップがある方が、このようなWSに参加する機会をつくれたことは、美術という側面からばかりでなく、彼らの社会参加を促す一助となり、一般の方にとってもよりバリアフリーを体感できるものとなった。（註3）

また、会期中1回目の2002（平成14）年度にはシンポジウムを開催し（写真1）、5回目の2006（平成18）年度には映画を上映し、様々な立場の方に、刺激を与える場を生み出すに至った。

【組織・ボランティア】

外部団体と連携して始めた本事業は、予算が極めて少ない状態でスタートしたが、ロゴ、ポスターデザイン、印刷、ディスプレイ看板や写真撮影等、本事業の趣旨を理解していただき、格安で各企業等の協力を得ることができた。その他、画材やボランティアの昼食の提供などの協力もいただいた。また、会期中様々なスタッフが必要となり一般に募集を行ったが、一般の応募者は少なく、学校関係者、福祉関係者、地域の造形教室の保護者がボランティアで、中高生が職場体験、大学生が授業の一環として参加いただいた。

このように外部団体・企業・ボランティアとの連携が、その後も教育普及では必要と考え、より柔軟に運営・予算執行ができる実行委員会形式へと2年目に移行した。

【課題】

年々参加者が増加し「みなび」が根付きつつあると感じたが、次第に展覧会に参加する学校やグループが特定化し、WSへの参加者も美術館に興味ある保護者の子どもたちが大多数を占めてきた。健常者も障がい者も、どなたでも参加できるという部分は保たれていたものの、美術作家の突出も感じられ、誰もが平等でこの場に参加するという部分が欠落し始めた。



（写真1）2002年8月11日
シンポジウム「上手い・下手って 誰が決めるの？」
展示会場で実施



（写真2）2003年8月12日
「さわる絵画」の公開制作 光島貴之氏



（写真3）2004年8月7日
「みえない人と一緒にみる・みなびツアー」
アイマスクをして障がいの体験を試みる



（写真4）2005年8月3日
「であう・びっくり・つながろう」WS

■第Ⅱ期 美術館から各地域へ 地域連携の時代

「新みなびー今・ここ・自分」

2007（平成19）～2009（平成21）年度

「とびだせ美術館！ーアートの種まきワークショップー」

2010（平成22）～2012（平成24）年度

第Ⅱ期の特徴

第Ⅰ期の課題を克服するために、なかなか美術館に足を運ぶ機会のない方々にも美術館を身近に感じてもらうために「美術館から地域へ」という考えに至り名称も新にした。作品募集はせず、美術館から県内各地域に出向き、その地域の方々に参加してもらいWSを実施し、そこでできた全ての作品を美術館に展示した。その結果「みなび」の活動にも興味を持ってもらえ、新たな層が美術館へ来館する事につながった。

第Ⅱ期の内容

（表2）

回	年月	テーマ	会場	事業内容	参加人数	ボランティア・スタッフ	主催	後援	協力	実行委員 ※※
6	2007 (平成19) 展示 8月16日 (木) ～ 23日(木)	今・ここ・自分	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショップ の作品 【ワークショップ 記録映像】 【ワークショップ】講師による WS ・「ちぎって きって かさねて (障がい者むけ)」 浅川洋、雨宮千鶴 午前午後2回161名 ・「かさねて こすって絵の具で遊ぼう」(上野 原市) 伊藤美輝 113名 ・「わたしの文字・みんなの文字」(身延町)成澤玲子 90名 ・「わたしの色・心の色」(富士河口湖町) 早川利 喜・NPO 法人虹の谷 138名 ・「マイ・スツール」(北杜市) 本杉琉 87名 ・「グリーンカーテン・グリーンテント」(昭和町) 坂本泉 138名 ・「わたし、そして、みんなと」(山梨市) 岩井慎太郎、五 味良富、日川高等学校、甲府東高等学校美術部 130名 ・「みんなでつなげよう」丸山純子 107名 以上、6月6日～8月16日に8回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木」	6,351名	129人 (大学生 19名) 延べ 308名	みなび実行委員会	山梨県造形 教育研究会 山梨県高 文連美術工 芸部門 山 梨県高等学 校美術工芸 研究科 山梨県福 祉協議会 笛吹市教育 委員会 NHK 甲府 放送局 山 梨日日新聞 社・山梨放 送 テレビ 山梨 山梨 新報社 朝日新聞甲 府 総局 テレビ朝日 甲府支局 産経新聞社 甲府支局 毎日新聞甲 府支局 読 売新聞甲府 支局 日本 ネットワー クサービ ス エフエム 富士 エフ エム甲府	ART BOX C.DESIGN アート印刷株式会 社 日本通運株式 会社 (有)ディスブ レイ遠藤 アオヤ ギフォトスタジオ わからず屋商兵 衛 べきん堂 画 材シンプク みく に画材店 人ねっ こ・アートワーク (株)機山堂 甲信 桐包(株) 香葉堂 布袋屋(南) 木 の国サイト (財) 山梨県郡内地域 地場産業振興セン ター (株)東日本イ ノアック (株)寝具 の望月 NPO 法 人虹の谷 NPO 法人芸術文化振 興センター (株) YSKc-com 富士 河口湖町中央公民 館 天龍山慈雲寺 身延町なかとみ 和紙の里 キャン ピカ明野ふれあいの 里 山梨学院大 学・短期大学 山 梨県立大学 都 留文科大学 山梨 大学教育人間科学 部美術教育講座・ 芸術運営コース そだち園 サント リーフーズ株式会 社 関東・甲信越支 社 (株)SPS やま なし	美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 雨宮千鶴 成澤玲子 高野直美 福:早川利喜 (副実行委員長) 日向佐織 教:福: 伊藤美輝 矢崎育子 教:岩井慎太郎 作:坂本泉 学:松岡あすみ 他:田中静男
7	2008 (平成20) 展示 8月3日 (日) ～ 14日(木)	今・ここ・自分	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショップ の作品 【ワークショップ 記録映像】 【ワークショップ】講師による WS ・「ねんどでつくろう！わたしのお皿、はくのお皿」 山主都子 午前午後2回231名 ・「メン・めん・お面」(笛吹市) 伊藤美輝 159名 ・「木や板で自分の世界をつくろう」(富士河口湖 町) 秋山令一 50名 ・「べったん ばったん わたしのもよう」(都留 市) 松岡あすみ・柴田彩 65名 ・「わたしの色・心の色」(韮崎市) 早川利喜・ NPO 法人虹の谷 187名 ・「筆をつくって、みんなで書で遊ぼう」(甲州市) 長田明後 205名 ・「秘密基地を作ろう」(身延町) 石田泰道 195名 ・「ダンボールでつくろう！！人物や動物」本杉琉 150名 ・「ミゴトゴミ・アートプロジェクト『森は迷路』」 (芸術の森公園) 坂本泉 192名 ・「むしゃむしゃかげむしゃ(身体表現)」鈴木つな 104名 ・「演劇で遊ぼう(身体表現)」(芸術の森野外音 楽堂) 齋藤綾乃 96名 以上、6月18日～8月14日に11回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木、開館30周年記念 ミレー作品を模写しよう」	11,120名	137名 (大学生 31、職 場体験 高校生 13・中 学生50) 延べ 308名	みなび実行委員会	山梨県福 祉協議会 笛吹市教育 委員会 NHK 甲府 放送局 山 梨日日新聞 社・山梨放 送 テレビ 山梨 山梨 新報社 朝日新聞甲 府 総局 テレビ朝日 甲府支局 産経新聞社 甲府支局 毎日新聞甲 府支局 読 売新聞甲府 支局 日本 ネットワー クサービ ス エフエム 富士 エフ エム甲府	衛 べきん堂 画 材シンプク みく に画材店 人ねっ こ・アートワーク (株)機山堂 甲信 桐包(株) 香葉堂 布袋屋(南) 木 の国サイト (財) 山梨県郡内地域 地場産業振興セン ター (株)東日本イ ノアック (株)寝具 の望月 NPO 法 人虹の谷 NPO 法人芸術文化振 興センター (株) YSKc-com 富士 河口湖町中央公民 館 天龍山慈雲寺 身延町なかとみ 和紙の里 キャン ピカ明野ふれあいの 里 山梨学院大 学・短期大学 山 梨県立大学 都 留文科大学 山梨 大学教育人間科学 部美術教育講座・ 芸術運営コース そだち園 サント リーフーズ株式会 社 関東・甲信越支 社 (株)SPS やま なし	美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 雨宮千鶴 成澤玲子 小俣直喜 福:早川利喜 (副実行委員長) 教:福: 伊藤美輝 矢崎育子 教:岡田昭夫 作:坂本泉 学:松岡あすみ 柴田彩 他:田中静男
8	2009 (平成21) 展示 8月1日 (土) ～ 13日(木)	今・ここ・自分	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショップ の作品 【ワークショップ 記録映像】 【ワークショップ】講師による WS ・「芸術の森で見つけた宝物でレリーフをつくろう (障がい者むけ)」成澤玲子・雨宮千鶴 161名 ・「いろいろな紙をつかって、おったり、きったり、 ぬったりしよう！」(市川三郷町) 藤本遥 122名 ・「すてきな楽しい服をつくりましょう」(富士吉 田市) 日向和子・田邊かほる 77名 ・「ウレタンで体のどこかに着ける何かをつくり ます」(甲府市) 岡田昭夫・駿台甲府高等学校 美術デザイン科 86名 ・「体感！ 墨の力 筆の力」(甲州市) 大橋洋之 236名 ・「明野の森でトーテムポールをつくろう」(北杜 市) 中島和也 75名 ・「森でアート・山の中に住んでいる動物をつく ろう」(大月市) 佐藤政道 65名 ・「わたしの色・心の色」(甲府市) 早川利喜・ NPO 法人虹の谷 89名 ・「マイシューズで歩こう」小松心平 120名	10,570名	137名 延べ 309名	みなび実行委員会	山梨県福 祉協議会 笛吹市教育 委員会 NHK 甲府 放送局 山 梨日日新聞 社・山梨放 送 テレビ 山梨 山梨 新報社 朝日新聞甲 府 総局 テレビ朝日 甲府支局 産経新聞社 甲府支局 毎日新聞甲 府支局 読 売新聞甲府 支局 日本 ネットワー クサービ ス エフエム 富士 エフ エム甲府	衛 べきん堂 画 材シンプク みく に画材店 人ねっ こ・アートワーク (株)機山堂 甲信 桐包(株) 香葉堂 布袋屋(南) 木 の国サイト (財) 山梨県郡内地域 地場産業振興セン ター (株)東日本イ ノアック (株)寝具 の望月 NPO 法 人虹の谷 NPO 法人芸術文化振 興センター (株) YSKc-com 富士 河口湖町中央公民 館 天龍山慈雲寺 身延町なかとみ 和紙の里 キャン ピカ明野ふれあいの 里 山梨学院大 学・短期大学 山 梨県立大学 都 留文科大学 山梨 大学教育人間科学 部美術教育講座・ 芸術運営コース そだち園 サント リーフーズ株式会 社 関東・甲信越支 社 (株)SPS やま なし	美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 市川知都里 雨宮千鶴 小俣直喜 福:早川利喜 (副実行委員長) 教:福: 伊藤美輝 矢崎育子 教:成澤玲子 岡田昭夫 作:坂本泉 学:柴田彩 四條朋恵 藤本遥

				・「グリーンカーテン Vol.2」坂本泉 77 名 ・「ネームプレートをつくろう」五十嵐智則・峡南 高等学校学生 2 日間544 名 ・「つくって楽しもう！わくわくバベット」いいむ ろまなみ 矢崎育子 260 名 以上、6 月17 日～8 月12 日に12 回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木」							
9	2010 (平成22) 展示 7月30日 (金) ～ 8月11日 (水)	川	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショップ の作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ・「サラサラサラ川をおる」(南アルプス市)山梨 学院短期大学保育専攻科学生 81 名 ・「大壁画ワークショップ」池田龍雄 100 名 ・「川に生きるものは・・・何かな？」美術館職員 76 名 ・「レッツスタンピング」(大月市)上條志園 61 名 ・「木の枝の三角体」(南部町)岩崎永人 30 名 ・「自然を感じて写景」(南アルプス市)美術館職 員 60 名 ・「大きい声を出してジャイアンになろう！(身 体表現)」福田稔 82 名 以上、2010 年5 月22 日～8 月6 日に7 回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木」	観覧者 1,115 人		みなび 実行 委員会		日本通運株式会 社 (有)ディスプレイ 遠藤 アオヤギ フォトスタジオ わからず屋商兵衛 べきん堂 画 材シンプク みく に画材店 人ねっ こ・アートワーク (株)機山堂 甲 信 桐包(株)香葉 堂 NPO 法人 虹 の谷 NPO 法人 芸術文化振興セン ター ガールスカ ウト山梨県連盟 身延町なかとみ和 紙の里 山梨学院 大学・短期大学 山梨県立大学地域 研究交流センター 都留文科大 山梨県立大学教育 人間科学部美術教 育講座・芸術運営 コース 帝京学園 短期大学 南アル プス子どもの村小 学校 南部町活 性化センター 南 アルプス芦安山岳 館 甲府市立貢川 小学校 大月イー ゼルアクション 貢川地区社会福祉 協議会 中富総 合会館 北杜市 立日野春小学校 富士河口湖町立大 石小学校 大月市 立猿橋小学校 山梨県立考古博物 館 笛吹市立富 士見小学校 甲府 市立城南中学校 (株)SPS やまなし サントリーフ ズ(株)	美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 市川知都里 雨宮千鶴 小俣直喜 春原史寛 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:成澤玲子
10	2011 (平成23) 展示 8月3日 (水) ～ 14日(日)	山	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 1年を通し てのワーク ショップの 作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ◇は前年度に実施、展示2011 年度 ◇「ちっちゃな幸せ+織って+つながって=おっ きな幸せ」(北杜市)村岡由季子 58 名 ◇「いっぱい描こう」(山梨市)アートセンターコ スモススタッフ 119 名 ◇「クリスマスのうたをうたおう」美術館職員 40 名 ◇「文字を楽しもう」(甲府市)石原美歩・清水 裕美 101 名 ・「モノタイプ版画で遊ぼう」美術館職員 午前午 後2 回102 名 ・「山をかこう！」櫻井孝美 75 名 ・「たぐさん山をかこう！」(北杜市)櫻井孝美 121 名 ・「大きな山をかこう！」(富士河口湖町)櫻井孝 美 146 名 ・「山川草木鳥獣虫魚」(美術館・芸術の森公園) 長田明後 82 名 ・「ごっこゴっこ(身体表現)」深澤さやか 107 名 以上、2010 年10 月23 日～2011 年8 月7 日に10 回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木、富士山をかこう」 ・ミニワークショップ「こまらないコマをつくろ う」福島孝一→コマを釜石の被災地の保育園へ 送る ・「絵手紙講座」県立文学館との共同企画	観覧者 2,482 名		みなび 実行 委員会	山梨県造形 教育研究 会 山梨県 高文連美術 工芸部門 山梨県高等 学校美術 工芸研究科 山梨県福 祉協議会 NHK 甲 府放送局 山梨日日新 聞社・山梨 放送テレ ビ山梨 山梨県山 梨新報社 朝日新聞 甲府総局 テレビ朝日 甲府支局 産経新聞社 甲府支局 毎日新聞甲 府支局 読 売新聞甲府 支局 日本 ネットワー クサービス エフエム 富士エフ エム甲府	美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 市川知都里 井上真弓 春原史寛 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:成澤玲子 小俣直喜	
11	2012 (平成24) 展示 7月29日 (日) ～ 8月11日 (土)	空	ワークショップ: 館内および 県内各地 展示: 山梨県立美 術館県民 ギャラリー C、他 (入場無料)	【作品展】 1年を通し てのワーク ショップの 作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ◇は、前年度に実施、展示2012 年度 ◇「大空 青空 星空・・・」(身延町)美術館職員 28 名 ◇「風をみよう、風になろう」(大月市)佐藤正道 125 名 ◇「たのしいクリスマス(笑いヨガ)」若松宏実 78 名 ◇「空をつくろう」(山梨市)伊藤美輝 102 名 ・「空をながめて空想しよう」(県立考古博物館) 考古博物館・美術館職員 32 名 ・「そら！描こう！！」中込靖成 207 名 ・「空ってどんな色？色で遊ぼう(障がい者むけ)」 美術館職員 午前午後2 回 88 名 ・「そら！描こう！！」(笛吹市)中込靖成 100 名 ・「空にむかってつくる」(北杜市)三井正人・帝 京学園短期大学保育科学生 140 名 ・「アート巣箱をつくろう」(都留市)島原正敏・ 北垣憲仁・館山拓斗・中村伸也 157 名 ・「空を染めよう！」(なかとみ和紙の里)笠井正大 92 名 ・「空にのぼる自分だけのはしご」(甲府市)成澤玲子 87 名 ・「お芝居をつくろう(身体表現)」佐藤拓也 42 名 ・「空のミキサー」伊藤美輝 105 名 以上、2011 年10 月15 日～2012 年8 月10 日に14 回 実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、積み木、富士山をかこう」 ／《空に立とう》茂井健司	観覧者 2,064 名		みなび 実行 委員会		美:白石和己 (実行委員長) 向山富士雄 市川知都里 井上真弓 小坂井玲 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:成澤玲子 小俣直喜 中村伸也	

【ワークショップ】

「新みなび」のテーマは、3 年間を通して「今・ここ・自分」とした。そこにはその場でその時しか起
こりえない、また感じえない共通体験を通し、豊かなコミュニケーションが生まれる中、新しい「自分」
を発見してほしいというねらいがあった。

「とびだせ美術館！—アートの種まきワークショップ—（以下 とび美）」は、より郷土の自然に目を向け、その中で心に響くものを探することができる体験を、という思いでスタートした。今まで夏だけ実施していた WS を通年開催に変更し、3 年計画で「川・山・空」をテーマに実施した。

WS の開催場所は、お寺、許可無しでは入れない公園（不法侵入防止のため要入園申請）（写真 5）、キャンプ場、小学校、市民会館などバラエティー豊かなものとなった。また、ワークショップの講師は、なるべく地域に関係が深い方をお願いし、WS 材料などは、地域の地場産品も取り入れ、その場で実施することに意味を持たせた。結果、地域の宝物探しをするようなことになり、参加者は、自分が住む地域を見直し、気軽に身近な素材を使ったアート体験をすることができた。「とび美」では WS 開催時期を広げたことで県内各地の四季を味わい、季節と地域と人がアート体験を通してかかわり、つながることができた。今期は県下の全小中学生に「みなび」チラシを配布し、また WS 開催地域にはその WS 単独のチラシも作成し配布した。その効果があり、WS への参加者は驚くほど増加し、リピーターも増えた。美術館を飛び出してのこの 6 年間は、県土のほぼ全域を対象にして開催することができたため、美術館の利用や、創作活動に参加する機会があまり持てない人に、山梨県立美術館を知ってもらい、表現活動を経験してもらう「アートの種まき」的機会となったであろう。また、展示会場では、毎日随時参加できるミニ WS を実施した。

【展示】

作品募集はせず、展示作品は、WS の作品を全て展示した。共同制作、個々の作品などバラエティー豊かなものになった（写真 6、7、9、15）。また、全 WS の記録映像を展示会場入口壁面へ映し出し、来館者を展示室へ導くことにつながった。

【組織・ボランティア】

県内各地域に出向く事により、大学、教職員の美術研究グループ、県内の博物館等との共催という形で各地の文化拠点と活動する機会が持てた。さらに、2、3 の企業からは、WS 材料の提供や扱い方の指導を通して美術館に興味をもってもらい、事ができた。美術館の協力員（ワークショップボランティア、実技ボランティア）の積極的参加や一般ボランティアの協力を得て、官民一体の新しい形が生まれ、その後も継続している。

【課題】

「みなび」は、本当にみなが繋がっているのか、地域を見つめているのか、作品完成に終始していないか、子どもたち以外の人が参加しにくくなっていないか（註 4）など課題が上がった。また「とび美」の通年開催の WS は、今までにない体験もあったが、時期や地域によっては参加者が少なく、WS 作品を展示までどのように保管しておくか、時を経てしまった作品の返却の方法など課題が生まれた。



（写真5）2007年
「グリーンカーテン・グリーンテント」WS
（昭和町）



（写真6）2007年 展示会場



(写真7) 2008年
「ダンボールでつくろう!! 人物や動物」WS 展示



(写真8) 2008年
「むしゃむしゃかげむしゃ」WS



(写真9) 2009年
「グリーンカーテン Vol.2」WS 展示



(写真10) 2010年
池田瀧雄氏による「大壁画」WS



(写真11) 2011年6月25日
櫻井孝美氏による「山をかこう」WS



(写真12) 2011年7月
WSの準備をする高校生スタッフ



(写真13) 2011年
「山川草木鳥獣虫魚」WS



(写真14) 2012年
「空にむかってつくる」WS (北杜市)



(写真15) 2012年 展示風景

■第Ⅲ期 ワークショップ重視の時代

「みんなでつくる美術館～アートではっけん！」 2013（平成25）～2015（平成27）年度

「みんなでつくる美術館～「しっぱい」は「せいこう」のもと」

2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

第Ⅲ期の特徴

今期は、3年間取り組む大テーマと年度毎に小テーマを設け実施した。地域に飛び出す事に捉われずに、創作活動を通して、楽しみ、つながることを前面に掲げWSに力を入れ展示も並行して考えた。

第Ⅲ期の内容

(表 3)

回	年月	テーマ	会場	事業内容		参加人数	ボランティア・スタッフ	主催	後援	協力	実行委員 ※※
12	2013 (平成25)	展示 7月27日(土) ～ 8月6日(火)	ワークショップ館内及び他2か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他／オリオン通り商店街(甲府市)(入場無料)	【作品展】 ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「色で遊ぼう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 109名 ・「自分ほっけん！自分コピーー風景の中の自分を眺めるー」(山梨学院短期大学)伊藤美輝・山梨学院短期大学保育科学生 70名 ・「水ってどんなかたち？」齊藤翔 110名 ・「ー親子で地域につながるー空に飛ばそう」(帝京学園短期大学)五十嵐正一・帝京大学短期大学教諭・学生 151名 ・「みんなできつくる『街なか楽書展』」(オリオン通り商店街・甲府市)長田明俊 70名 ・「ーたかが線、されど線、みんなの線！ー線の挑戦！」茂井健司 135名 ・「好きな服をつくろう！」小澤優美 69名 ・「アート・フラッグでかざろう！」美術館職員 230名 ・「びっくり！どっきり？かげあそび！(身体表現)」佐藤拓也 125名 以上、5月23日～8月6日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙81名、富士山をかこう251名」	観覧者 1,301名	延べ 253名 含む職場体験	みなび実行委員会	山梨県造形教育連合 山梨県福祉協議会 NHK甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送テレビ 山梨山梨新報社 朝日新聞甲府総局 テレビ朝日甲府支局 産経新聞社甲府支局 毎日新聞甲府支局 読売新聞甲府支局 日本ネットワークサービス エフエム富士 エフエム甲府 エフエムハケ岳	河口湖美術館(南ディスプレイ遠藤アオヤギフォスタジオ 日本通運株式会社山梨支部 静岡県プロセスわかからず屋商兵衛ペきん堂 画材シブク みくに画材店 人ねっこ・アートワーク 樹園山堂 甲信梱包(株) 香葉堂 ガールスカウト山梨県連盟 身延町なかとみ和紙の里 山梨学院大学・短期大学 山梨県立大学地域研究交流センター 山梨大学 人間科学部 日本ネットワークサービス 甲府城南商店街振興組合(南桂工務店)研究所有てる株式会社 奥野商店 cocochi(株) SPS やまなしサントリーフーズ(株)	美:白石和己(実行委員長) 向山富士雄 井上真弓 五味一也 森川もなみ 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:市川知都里 成澤玲子 中村伸也
	2014 (平成26)			ワークショップ館内及び他3か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他(入場無料)	【作品展】 ・公募作品 「ミレーのまなざしを描く」25グループ 315名 ・ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「色や形を楽しもう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 73名 ・「種をまく人をつくろう～一家に一体(ひとり)種をまく人～」(山梨学院短期大学)伊藤美輝・山梨学院短期大学保育科学生・佐藤拓也 82名 ・「ゴロ画伯の紙芝居「なにまく人?～ゴロ画伯とライブマンガで遊ぼう～」松村宏 51名 ・「君も《種をまく人》になろう」(河口湖美術館・芝生広場)美術館職員 38名 ・「ミレーを知ろう～種をまく人になってみよう～(身体表現)」(アイメッセ・甲府市)佐藤拓也・秋和聡 約200名 ・「みなび展と一緒に準備しよう」木杉琉 以上、6月19日～8月5日に6回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙、富士山をかこう、羊をつくろう、作品の登場人物になりきろう(種をまく人)、手で見るミレー体験」					
13	2014 (平成26)	展示 7月26日(土) ～ 8月5日(火)	ワークショップ館内及び他3か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他(入場無料)	【作品展】 ・公募作品 「ミレーのまなざしを描く」25グループ 315名 ・ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「色や形を楽しもう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 73名 ・「種をまく人をつくろう～一家に一体(ひとり)種をまく人～」(山梨学院短期大学)伊藤美輝・山梨学院短期大学保育科学生・佐藤拓也 82名 ・「ゴロ画伯の紙芝居「なにまく人?～ゴロ画伯とライブマンガで遊ぼう～」松村宏 51名 ・「君も《種をまく人》になろう」(河口湖美術館・芝生広場)美術館職員 38名 ・「ミレーを知ろう～種をまく人になってみよう～(身体表現)」(アイメッセ・甲府市)佐藤拓也・秋和聡 約200名 ・「みなび展と一緒に準備しよう」木杉琉 以上、6月19日～8月5日に6回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙、富士山をかこう、羊をつくろう、作品の登場人物になりきろう(種をまく人)、手で見るミレー体験」	観覧者 2,157名	67名+職場体験	みなび実行委員会	山梨県立大学地域研究交流センター 山梨大学 人間科学部 日本ネットワークサービス 甲府城南商店街振興組合(南桂工務店)研究所有てる株式会社 奥野商店 cocochi(株) SPS やまなしサントリーフーズ(株)	美:白石和己(実行委員長) 向山富士雄 平林彰 中島博美 五味一也 森川もなみ 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:井上真弓 市川知都里 中村伸也	
	2015 (平成27)			ワークショップ館内及び他2か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他(入場無料)	【作品展】 ・公募作品 「おくりもの」64点 127名 ・ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「太陽からのおくりもの～色や形を楽しもう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 99名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日 準備ワークショップ」5日間 木村崇人 81名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日①宝石の樹」木村崇人 午前午後2回 33名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日②想像の動物」(河口湖美術館)木村崇人 午前午後2回 124名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日③想像の神・想像の星」木村崇人 午前午後2回 156名 ・「わすれられないおくりもの」(アイメッセ・甲府市)佐藤拓也・美術館職員 200名 ・「まるいおくりもの」美術館職員 95名 ・「たかが新聞紙、されど新聞紙、新聞紙から生まれるあーと」美術館職員 70名 以上、6月24日～8月6日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」					観覧者 1,731名
14	2015 (平成27)	展示 7月26日(日) ～ 8月6日(木)	ワークショップ館内及び他2か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他(入場無料)	【作品展】 ・公募作品 「おくりもの」64点 127名 ・ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「太陽からのおくりもの～色や形を楽しもう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 99名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日 準備ワークショップ」5日間 木村崇人 81名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日①宝石の樹」木村崇人 午前午後2回 33名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日②想像の動物」(河口湖美術館)木村崇人 午前午後2回 124名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日③想像の神・想像の星」木村崇人 午前午後2回 156名 ・「わすれられないおくりもの」(アイメッセ・甲府市)佐藤拓也・美術館職員 200名 ・「まるいおくりもの」美術館職員 95名 ・「たかが新聞紙、されど新聞紙、新聞紙から生まれるあーと」美術館職員 70名 以上、6月24日～8月6日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」	観覧者 1,731名	49名+職場体験 57名	みなび実行委員会	エフエム富士 エフエム甲府 エフエムハケ岳	美:白石和己(実行委員長) 向山富士雄 井澤英理子 平林彰 中島博美 五味一也 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:井上真弓 中村伸也 協:鳥津久美子 作:梅津譲	
	2016 (平成28)			ワークショップ館内及び他2か所 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、他(入場無料)	【作品展】 ・公募作品 「おくりもの」64点 127名 ・ワークショップの作品 【ワークショップ記録映像】	【ワークショップ】講師によるWS ・「太陽からのおくりもの～色や形を楽しもう！(障がい者むけ)」美術館職員 午前午後2回 99名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日 準備ワークショップ」5日間 木村崇人 81名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日①宝石の樹」木村崇人 午前午後2回 33名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日②想像の動物」(河口湖美術館)木村崇人 午前午後2回 124名 ・「太陽からのおくりもの～雲になる日③想像の神・想像の星」木村崇人 午前午後2回 156名 ・「わすれられないおくりもの」(アイメッセ・甲府市)佐藤拓也・美術館職員 200名 ・「まるいおくりもの」美術館職員 95名 ・「たかが新聞紙、されど新聞紙、新聞紙から生まれるあーと」美術館職員 70名 以上、6月24日～8月6日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」					観覧者 1,731名

15	2016 (平成28) 展示 7月28日 (木) ～ 8月8日 (月)	ワークショッ プ館内及び 他1か所 展示: 山梨県立美術 館県民ギャラ リーC、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショッ プ6件の作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ・「色や形をたのしもう! (障がい者むけ)」早川 利喜・NPO 法人虹の谷 午前午後2回 156 名 ・「ふしぎ図鑑をつくろう」(河口湖美術館)上條 曉隆 118 名 ・「ダイナミック水墨画! 芸術の森公園を描こう!」 美術館職員 109 名 ・「アートジャングル! 山梨県立美術館!」茂井健 司 150 名 ・「音の色、音の形～図工オーケストラ～」丸山純 子 182 名 ・「オリジナルノートを作ろう」鈴木和美・山本か つ江 午前午後2回 255 名 ・「音楽リズムあそび」坂井文子・栢岡由美子 179 名 ・「くねくね、もりもり動物!」美術館職員 304 名 ・「空き箱マリオネットをつくろう」伊藤美輝 141 名 以上、6月22日～8月8日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」	観覧者 1,896 名	延べ 134 名 (含む職 場体験)	みなび 実行委員 会	山梨県造形 教育連合 山梨県福 祉協議会 NHK 甲 府放送局 山梨日日新 聞社・山梨 放送テレ ビ山梨山 梨新報社 朝日新聞 甲府総局 テレビ朝日 甲府支局 産経新聞社 甲府支局 毎日新聞甲 府支局 読 売新聞甲府 支局 日本 ネットワー クサービス エフエム富 士エフエ ム甲府エ フエムハ ケ岳	河口湖美術 館 (南)ディス プレイ遠 藤 日本通運(株)山 梨支店 (株)島 田	美:白石和己 (実行委員長) 井澤英理子 中島博美 五味一也 高野早代子 下東佳那 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 教:中村伸也 協:島津久美子 作:梅津譲
16	2017 (平成29) 展示 7月29日 (土) ～ 8月9日 (水)	ワークショッ プ館内及び 他1か所 展示: 山梨県立美術 館県民ギャラ リーC、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショッ プ6件の作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ・「色や形をたのしもう! (障がい者むけ)」美術 館職員 午前午後2回 94 名 ・「トントンビュー! 夏空に負けないいろんな青 を染めよう」(河口湖美術館)大金晶子 168 名 ・「夏だ! 祭りだ! ワッショイ! ワッショイ!」古 屋崇久 70 名 ・「不思議図鑑パート2」美術館職員 119 名 ・「輪っか! 輪っか! みんなでつなげよう!」志村 陽子 90 名 ・「びでか☆フレンズ」駿台甲府高等学校美術デ ザイン科学生 172 名 ・「バクバク人形劇」伊藤美輝 80 名 ・「みなびまつり」古屋崇久 56 名 ・「ピノキオごっこで遊ぼう! (身体表現)」鈴木 つな 38 名 以上、6月21日～8月9日に9回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」	観覧者 1,221 名	延べ 280 名 (含む職 場体験)	みなび 実行委員 会	山梨県立大 学地域研 究交流セン ター 山梨大学 教育学部 芸術文化 教育 講 大石 紘 信 統 工芸館 フジギ ラ(株) 駿 台甲府高 等学校美術 デザイン科 (株)大直 大塚製菓(株) (株)SPS やまなし サ ントリーフ ーズ(株)	美:青柳正規 (実行委員長) 井澤英理子 五味一也 百瀬淳一 高野早代子 下東佳那 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 小俣晴美 教:中村伸也 協:島津久美子 作:梅津譲 指:西野聡美	
17	2018 (平成30) 展示 7月25日 (水) ～ 8月3日 (金)	ワークショッ プ館内及び 他1か所 展示: 山梨県立美術 館県民ギャラ リーC、他 (入場無料)	【作品展】 ワークショッ プ4件の作品 ・スクールブ ログラムで 来館した近 隣の小学生 が描いた絵 画作品 【ワークショップ 記録映像】	【ワークショップ】講師による WS ・「仮面で変身! (障がい者むけ)」高橋辰雄 午前午後2回 83 名 ・「色と踊って世界をつくろう(身体表現)」(河口 湖美術館)鈴木つな 155 名 ・「みんなでたまご」渡辺弥生 2日間 183 名 ・「壁をのぼる生き物」美術館職員 午後2回 157 名 ・「ねばねばつなげて広げよう!」田中静男 70 名 ・「大人の造形広場」伊藤美輝 115 名 ・「どろだんごで種づくり」石田泰道・甲府第一 高等学校美術部 214 名 ・「Let's ダンス!! 腹のムシ(身体表現)」鈴木つ な 80 名 以上、7月11日～8月3日に8回実施 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「来年 のわたしへのお手紙、富士山をかこう、ミニ工作」	観覧者 3,224 名	延べ 102 名 (含む職 場体験)	みなび 実行委員 会	山梨県立大 学地域研 究交流セン ター 山梨大学 教育学部 芸術文化 教育 講 大石 紘 信 統 工芸館 フジギ ラ(株) 駿 台甲府高 等学校美術 デザイン科 (株)大直 大塚製菓(株) (株)SPS やまなし サ ントリーフ ーズ(株)	美:青柳正規 (実行委員長) 井澤英理子 百瀬淳一 瀧澤智子 高野早代子 下東佳那 雨宮千鶴 教・福: 伊藤美輝 (副実行委員長) 他:田中静男 小俣晴美 教:中村伸也 協:島津久美子 今村浪芳 作:梅津譲 指:岩野りえ	

【ワークショップ】

美術館を起点とし、その他県内2、3カ所でも WS を展開した。地域商店街 (写真 17) や現代美術作家 (写真 16、23、27、29、31) とのコラボレーションに力を入れた。また美術館職員、美術館協力員、高校の美術部などの企画による WS を実施した。WS は必ずしも展示に拘らず、その過程や身体表現 (写真 28) などを楽しむものにも力を入れた。夏休みには、小学生の親子連れが大半をしめ、近隣の学童保育や保育園の団体も多くみられ、リピーターがかなり増え、参加者が 200、300 人を超える WS が出てきた。誰もが気軽に自由に参加でき、上手い下手関係なく創作活動が楽しめる「みなび」の WS は、地域密着度が非常に高いものとなった。市民、県民と美術館の距離を近づけようと、実行委員会で話し合いを重ねてきた成果であろう。展示会場では、すぐに誰でも参加できるミニ WS (写真 19、30) を開催する形を続け連日賑わった。以下、記録集に書かれた言葉を引用したい。

「誰もが自由に参加し、お互いに刺激を受けながら自由に制作 (表現) し、そして展示した互いの作品の良さを感じ取る。それぞれ、どのワークショップに参加した人からも「楽しかった。」という声が聞こえた。展示会場では「これやってみたいな。」という声が聞こえた。ボランティアスタッフとして参加した人からも「こんなに楽しいものならもっとたくさんの人に参加してもらいたい。」「一生懸命創作する姿を間近

で応援できてよかった。」という声があった。「みなび」の活動に携わると、自然に手と手をつなぐことができる。その人の輪がどんどん膨らんでいくのを目にすることができる。」(註5)

上記のように、参加者が造形、創造の可能性に触れ、体験や楽しさを共有し「みなび」を深化させた。

【展示】

WS 作品を中心に展示、2014（平成 26）、2015（平成 27）年度には、エントリー制で作品募集をし、それらも展示した。また、2018（平成 30）年度には、近隣の小学校 5 校がスクールプログラム（校外学習で来館）で描いた作品を同時に展示した。これは、WS が年々変化し、展示に結び付ける意義を感じられなかったので、展示会場を埋めるための策でもあり、近隣の多くの子ども、その家族にもっと美術館へ足を運んでもらいたいという考えからであった。

【課題】

WS への参加人数が増えれば増えるほど、安全性の確保、スタッフへの負担、さらには参加者へ平等に接することができないなど問題が表出した。また WS と展示のバランスが崩れ、「みなび」を見直すことが必要になってきた。記録集の中に書かれている文を引用したい。

「「みなび」は WS だけではなくありません。WS の作品を展示し、その会場にいらしてくださる鑑賞者にそれぞれの WS で共有した体験や作品を通して投げかけています。美術館は鑑賞者がいないと成立しません。「みなび」の鑑賞者が今後、見るだけの存在でなく「みんなでつくる」部分にいつでも参加でき、体感できる「美術館」、WS や展示をまとめてトータルにいつも稼働している～ing（進行形）な「みなび」になったらさらに楽しいと思います。」(註6)



(写真16) 2013年 「一たかが線、されど線、みんなの線！
一線の挑戦！」展示とミニ WS



(写真17) 2013年 「みんなでつくる『街なか楽書展』」
(オリオン通り商店街／甲府市)



(写真18) 2014年 「ミレーの家」制作



(写真19) 2014年 「羊をつくろう」ミニ WSの展示



(写真20) 2014年 ゴロ画伯の紙芝居



(写真21) 2014年 みなび展入り口



(写真22) 参加者アンケートの一部



(写真23) 2015
「太陽からのおくりもの一雲になる日」WS (河口湖)



(写真24) 2015年 展示会場でのWS



(写真25) 2016年
「色や形をたのしもう」障がい者と幼児向け WS



(写真26) 2016年
「ふしぎ図鑑をつくろう」WS (河口湖)



(写真27) 2016年
丸山純子氏 WS の前に作家の作品を鑑賞



(写真28) 2017年 「ピノキオごっこで遊ぼう」WS



(写真29) 2017年 「みなびまつり」



(写真30) 富士山を描こうミニ WS



(写真31) 2018年 「仮面で変身！」WS

■第Ⅳ期 新たな「みなび」 2019（令和元）～2021（令和3）年度

2007（平成19）年度から続けていた誰もが申込なしで参加できるワークショップとその成果物の展示を核とした「みなび」を見直し、じっくり制作、鑑賞できる「みなび」を目指すため、メインアーティストとして「移住を生活する」プロジェクトで活躍中の村上慧氏を迎え新たな「みなび」を展開した。その後、2020年度、2021年度と村上氏を軸に実施したが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、さらに新しい方向性を探る「みなび」となった。

第Ⅳ期の内容

（表4）

回	年月	テーマ	会場	事業内容	参加人数	ボランティア・スタッフ	主催	後援	協力	実行委員 ※※
18	2019 (令和1) 展示 7月27日 (土) ～ 8月1日 (木)	美術館に「住む」？	トークショー： 講堂 展示： 山梨県立美術館県民ギャラリーC、ギャラリーエコー、館内外各所（入場無料）	メインゲスト村上慧（美術家） 【村上慧トークショー・みなび説明会】 5月19日 122名 【ワークショップ】 ・「美術館に心地よい居場所をつくらう」村上慧 4回 77名（各回5組） ・「お部屋を飾ろう！（障がい者むけ）」村上慧、美術館職員 2日間午前午後2回 315名 ・「つくる」って何？挑戦してみよう！棉から糸へ」みらいファーム 5回 79名 ・展示会期中随時参加可能ワークショップ「絵はがきのかえっこ、富士山をかこう」 【展示】 ・「家」：ワークショップ作品22点、招待／事前エントリーグループ・作家作品15点（山梨学院短期大学保育科伊藤ゼミ、専門学校サンテクノカレッジ、県立峡南高等学校クラフト科、県立甲府工業高等学校建築研究部、県立甲府第一高等学校美術部、駿台甲府高等学校美術デザイン科、絵画造形教室 アトリエさくら、カワイ絵画造形教室、たまご教室、Mt.Fuji Project、チーム ジュリア、茂井健司（現代美術家）、本杉 琉（美術家）、雨宮国広（縄文大工）、小澤建築工房） ・「村上慧の映像展」 7作品及び「家」 ・「小さな家」応募作品 ・「山梨県立美術館を題材で作った模型」 【村上さんと美術館に泊まった】【家裏めツアー】【家制作者と村上さんが語る会】	観覧者 2,646名	68名（含む職場体験）	みなび実行委員会	山梨県造形教育連合 山梨県福祉協議会 NHK 甲府放送局 山梨日日新聞社・山梨放送 テレビ山梨 山梨	（福）さかき会みらいファーム 河口湖美術館 南アルプス市立美術館（南）ディスプレイ遠藤 日本通運（株）山梨支店（株）島田プロセス べきん堂 みくに画材店 山梨・人ねっアートワーク 山梨学院大学・短期大学 甲信 桐包（株）（株）大直（株）東日本イノアック 大塚製薬（株）（株）SPS やまなし サントリーフーズ（株）	美：青柳正規（実行委員長） 井澤英理子 瀧澤智子 小俣直喜 高野早代子 下東佳那 雨宮千鶴 教・福：伊藤美輝（副実行委員長） 他：田中静男 小俣晴美 教：中村伸也 協：島津久美子 田中實 作：梅津譲 鈴木つな 指：波多野秀子
19	2020 (令和2) 展示 2月9日 (火) ～ 3月21日 (日)	自分の「家」を見てみよう！	展示： ギャラリーエコー（入場無料） トークショー： 図書館閲覧室・廊下	メインゲスト村上慧（美術家） 【募集ワークショップ】 ・「ドアノブ採集ワークショップ on the Web「このドアを開けたら」」ウェブ上で開催（7月末～11月末）、テレビCMで募集 投稿作品117点、ホームページ、インスタグラムで公開 【展示】 「このドアをあけたら with 村上慧展」 ・村上慧ドローイング、立体、映像作品13点 ・投稿作品画像 【テーマソング募集】 ・応募楽曲54曲 採用曲ホームページで発信、テレビCMで使用 【雨宮国広×村上慧トークショー】 2021年2月9日 12名 公式 YouTube で公開	（データ取得不可）	（ボランティアの活動なし）	みなび実行委員会	新報社 朝日新聞甲府総局 テレビ朝日甲府支局 産経新聞社甲府支局 毎日新聞甲府支局 読売新聞甲府支局 日本ネットワーク サービス エフエム富士 エフエム甲府 エフエム八ヶ岳	（株）小澤建築工房	美：青柳正規（実行委員長） 井澤英理子 瀧澤智子 小俣直喜 高野早代子 下東佳那 雨宮千鶴 教・福：伊藤美輝（副実行委員長） 他：田中静男 小俣晴美 教：中村伸也 協：島津久美子 田中實 作：梅津譲 鈴木つな 指：波多野秀子
20	2021 (令和3) 9月14日 (火) ～ 10月3日 (日) (当初予定より延期)	自分のための果をつくる	展示： ギャラリーエコー、館内外各所（入場無料）	メインゲスト村上慧（美術家） 【募集ワークショップ】 ・「「果」づくりホームワークにトライ!!」 63点 【展示】 ・村上慧作品「移住を生活する記録写真、映像」「家」 ・募集作品画像 ・招待グループ・作家作品14点（山梨学院短期大学保育科伊藤ゼミ、専門学校サンテクノカレッジ、県立甲府工業高等学校建築研究部、県立甲府第一高等学校美術部、県立笛吹高等学校美術部、県立富士北陵高等学校建築デザイン系列、駿台甲府高等学校美術デザイン科、韮崎市立韮崎東中学校美術部、絵画造形教室 アトリエさくら、カワイ絵画造形教室、たまご教室、美術教室「アトリエたんだわ」、本杉 琉（美術家）、雨宮国広（縄文大工）	（データ取得不可）	（ボランティアの活動なし）	みなび実行委員会		（南）ディスプレイ遠藤 日本通運（株）山梨支店（株）島田プロセス べきん堂 みくに画材店（株）SPS やまなし	美：青柳正規（実行委員長） 井澤英理子 高野早代子 小林紀子 加藤祥子 雨宮千鶴 高橋のどか 教・福：伊藤美輝（副実行委員長） 他：田中静男 教：中村伸也 協：島津久美子 田中實 作：鈴木つな 指：金原あかね

村上氏との1年目は「美術館に『住む』？」をテーマとした。「みなび」開始以来はじめて要申込、定員制のWS（写真32）を開催し、展示作品はWS作品以外に事前にエントリーした団体や個人（作家）、

そして制作依頼をした団体や個人の作品とした。それらを県民ギャラリーのほか普段は展示場所ではない美術館内外のパブリックスペース各所に展示した（写真34）。作品の制作者によるギャラリー・トークを行ったことで鑑賞者との交流を深め、新たな出会いと発見が生まれた。

2年目はコロナ禍において「自分の家をよく見よう」というテーマで初めてウェブ上での実施。「ステイホーム」という言葉が生まれ「集う」ことが難しくなり、個が見つめた日常を作品にしてメールで寄せてもらったの「みなび」となった。寄せてもらった画像はインスタグラムや美術館ホームページで紹介し、プリントアウトし館内にも展示した（写真35）。募集期間を5ヶ月間設定したが、応募作品数は多いとは言えなかった。また「みなび」テーマソングを募集し、全国から54楽曲が集まった。

そして3年目は、自分のための「巣」づくりへと発展した。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、WSはすべて中止、展示は延期。参加者には家で制作した作品画像を投稿してもらった。それをプリントアウトしたものと村上氏の作品、事前に制作依頼をした団体・個人（作家）の作品を2019（令和元）年度と同様に館内外各所に展示した（写真37）。コロナ禍のため制作者と鑑賞者、さらにメインゲストとの交流の機会はあまり持てなかった。

この3年間は、今までとは全く異なる「みなび」の形態をとることになった。いままで通り、工作やものづくりのWSを望む声が多かったのも事実であるが、参加者の個々の能動的な姿勢で楽しもうとする様子（註7）などから、これからの「みなび」のあり方に対して、新たな扉を開くものとなったのではないだろうか。また、今後ウェブの活用方法をさぐりリアル「みなび」と併行しての進め方を考える必要がある。



(写真32) 2019年
「美術館に心地よい居場所をつくろう」WS



(写真33) 2019年 「綿から糸へ」WS



(写真34) 2019年
1階ロビーに作品の「家」展示



(写真35) 2020年
「このドアをあけたら」展示



(写真36) 2020年
「雨宮国広×村上慧トークショー」



(写真37) 2021年 2階ロビーに展示

おわりに

以上概観してきたように「みなび」は、当館開館 43 年の半分近い 20 年という時間の中で様々な提言を展示、WS という方法で行ってきた。そして開館当初より「開かれた美術館」を標榜してきた中で、「みなび」は重要な役割を果たして来たと言えるのではないだろうか。

20 年前は「アールブリュット」「アウトサイダーアート」など、障がい者アートに注目が集まり始めていた頃であった。それらも包括し、もっと広い視野で、いろいろな個性を持った、いろいろな立場の人が参加できることが重要だと考えたことが、今まで「みなび」を継続してこられた大きな理由のひとつであろう。また、「みなび」開始当時、ワークショップは、社会にさほど定着していない時期であったが、創作、鑑賞、障がいの体験、異文化の体験などを様々な形で行い続けた。県内各地域に発信し、多数の参加者を得て、かけがえのない体験を得られる「みなび」として地域に定着できた。さらに、実行委員、様々な場面で援助していただいた多くの協力者やボランティアの力も「みなび」継続の大きな要因である。

今まで「みなび」が残してきたものを基に、今後、コロナ禍だけでなく、様々な状況にも対応することが求められる中、緩やかな展開や発展が出来るような「みなび」のために必要なことを考えていかなければならない。企画や運営が硬直化しないようにしなやかな連携や循環、または螺旋状での進展を心掛けるために、常に情報収集も心がけ、「みなび」とは何か、県民に対して何ができるか、組織やメンバー全体で考え、かたちにすることが今、我々に求められていることではないだろうか。常に問い続けることが、より良い「みなび」の発展につながると考える。

註

- 1 団野雅子 山梨県在住の美術作家 特別支援学校での非常勤講師を経て、障がい者の芸術活動の支援をしている。
- 2 「詩と絵のコラボレーション展」
団野雅子氏を中心に、1993 年に特別支援学校、障がい者の作品を広く発表することを目的として「小さな芽展」を始め、その後、美術作家の作品も加え、「山の都ふれあいコンサート」で募集する詩を組み合わせ 1996 (平成 8) ~ 2001 (平成 13) 年度まで毎年開催した展覧会。
- 3 『みなび 5 年間のあゆみ』2002 ~ 2006 年記録集
p.7 「みなび」に参加して アンケートより
「少人数グループに分かれて参加していますが、会場でご迷惑をおかけすることも多々ありその都度サポートしていただき感謝しております。美術という側面からだけでなく、社会参加という意味からも今後積極的に参加したいと考えております。」(知的障害者更生施設職員)
p.8 大学生アンケートから
「アートというのは目で見るだけのものではない。見えない作品は、目の見えない人が楽しむことはできないかもしれない。しかし、そばにいる人が見せてあげれば、その作品はその人にとって見える作品になる。ハンデキャップがあるないに関係なく、一緒にアートを体験し、その素晴らしさを分かち合えるというのは、とても素敵な事だ。こういうふれあいこそ、「障害者」という枠を取り払って“人”と“人”として付き合うきっかけとなるのではないだろうか。」
- 4 『山梨県立美術館研究紀要 26・27 号』「参加型教育美術展「とびだせ美術館！ーアートの種まきワークショップー」 p.25
- 5 『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2013 ~ 2015 年記録集 p.25
- 6 『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2016 ~ 2018 年記録集 p.18
- 7 『みんなでつくる美術館 2019 記録集』 p.40

参考文献

- ・『みなび 5 年間のあゆみ』2002 ~ 2006 年記録集
- ・『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2007 ~ 2009 年記録集
- ・『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2010 ~ 2012 年記録集
- ・『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2013 ~ 2015 年記録集
- ・『みんなでつくる美術館 3 年間の歩み』2016 ~ 2018 年記録集
- ・『山梨県立美術館研究紀要第 24 号』参加型教育美術展「新みなび」
- ・『山梨県立美術館研究紀要第 26・27 号』参加型教育美術展「とびだせ美術館！ーアートの種まきワークショップー」
- ・『みんなでつくる美術館 2019 記録集』
- ・『みんなでつくる美術館 2020 記録集』
- ・『ふれあいの小さな芽 詩と絵のコラボレーション展』山の都ふれあいコンサート実行委員会 1996 年

論文要旨

栗田宏一 土と「出会う」まで

太田 智子

山梨県立美術館は令和2年度に特別展「栗田宏一・須田悦弘展－Contentment in the details－」を開催した。栗田宏一は、およそ30年に渡り日本全国の土を採集しインスタレーションする《ソイル・ライブラリー》を発表しており、特別展の中でも土の多彩さを伝える作品が展示されたが、土に至るまでにさまざまな表現を模索していたことを紹介することはできなかった。しかしキャリアの初期においても、土の作品に通じる姿勢が一貫して垣間見えること、また人との出会いを経ながら多くのことを試みた過程が、のちにライフワークとなる土につながっていることは非常に重要である。特に、森や海を舞台とした身体表現や、1年の半分を費やすような世界各地への旅、そして旅の中での石や土の採集は、栗田の作品の根幹を成している。それは、自分の身体を基本とし、その身体が土をはじめとした自然物と何ら変わらない等価のものである、という考えである。さらに、各地の土は、その土地に生きる人々の身体をも含む存在と捉えられる。この視点を持った栗田が各地の土に「出会う」ことにより、土本来の驚くような美しさが提示されることとなる。

Summaries

KURITA Koichi—Before “Encountering” Soil

OTA Tomoko

In 2020, a special exhibition “KURITA Koichi×SUDA Yoshihiro –Contentment in the details–” was held at Yamanashi Prefectural Museum of Art. Kurita presented his installation *Soil Library*, which features soil collected from around Japan over the course of 30 years. The works Kurita displayed in the special exhibition spoke of the diversity of soil, however we were not able to introduce the various forms of expression he had explored before coming to that material. It is very important that the stances taken in his soil-based works can be consistently traced even from early on in his career, and that his attempting of many things through encounters with people is connected to his lifework with soil. In particular, physical expressions taking place in the forest or at the ocean, devoting half of the year to traveling to various parts of the world, and the collecting of rocks and soil during those journeys, form the basis of Kurita’s work. Kurita thinks of his own body as fundamental, something that is equal and unchanging in value like other natural entities, including soil. Moreover, he feels that the soil of each place could hold the bodies of the people who lived in that land. It is when Kurita, an artist with such perspectives, “encounters” soil from all over the world, that the almost surprisingly intrinsic beauty of soil is presented.

研究ノート

医療従事者に対する美術館の役割 ―北米の事例を中心に―

下東 佳那

芸術が心身にもたらす効果は長年研究、実践されてきたが、近年においては治療（キュア）やケアを受ける側だけでなく、医療等を提供する側が芸術に触れることで得られる効果が報告されている。中でも医学部や医療機関が近隣の美術館と連携して開発した、医学生や医療従事者を対象としたプログラムなどが北米を中心に多数ある。これらのプログラムは美術作品鑑賞をとおして観察力の向上、エンパシー（共感力）の促進、リフレクション（内省）の助長、チームワークの育成などの効果を目的としている。本稿では特にハーバード大学医学大学院や、同学付属ブリガム・アンド・ウイメンズ病院で開発および実践されてきたカリキュラムなどの事例を取り上げ、美術館の新たな役割を探る。

Research notes

The role of art museums in relation to healthcare professionals, centering on examples from North America

SHIMOHIGASHI Kana

The effects of the arts on mind and body have been researched and put to positive use for a decades, but in recent years, there have been reports that not only recipients of medical treatment and care, but also health care providers can benefit from coming into contact with the arts. Particularly in North America, there are many programs provided for medical students and healthcare professionals, which have been developed through collaborations between medical schools, medical institutions and neighboring art museums. Among other things, the purpose of these programs is to improve observational skills, promote empathy, encourage self-reflection, and foster teamwork through art appreciation. This article describes examples such as that of curriculums developed and practiced by Harvard Medical School and its affiliated Brigham and Women's Hospital, exploring a new role for art museums.

「みんなでつくる美術館」の20年を振り返って

雨宮 千鶴

山梨県立美術館では、鑑賞と創作が合体したプログラムとして1988（昭和63）年度より「ミレーを描く会」、「感想文コンクール」、「作文コンクール」、「詩と絵のコンクール」などを実施してきた。これらを発展させ「みんなでつくる美術館（みなび）」が2002（平成14）年度にスタートし、本年度で20回の開催となった。大人も子どもも、障がいがある人もない人も、作家も一般の方も誰もが参加できる事業として定着している。

本稿では、20回の「みなび」を大きく4期に分けて振り返りを行い、成果を検証し、これからの普及事業に生かしたいと考える。第1期は、詩と美術作品の募集及び展示やワークショップなどを行った。第2期では、名称を「新みなび」、そして「とびだせ美術館！アートの種まきワークショップ」と改称し、美術館に来ることができない遠方の方にも参加してもらおうと県内各地でワークショップを行った。2013（平成25）年度からの第3期は「みんなでつくる美術館」と名称を戻し、3年間取り組む大きなテーマと、1年ごとに設けるテーマを設定する形になった。2019（令和元）年度からの第4期はメインの美術作家を中心にワークショップや展示などを実施し、観覧者・参加者にアートに接する機会を提供しようと試行錯誤を続けている。

Looking Back on Twenty Years of *A Museum Made by Everyone (Minabi)*

AMEMIYA Chizuru

Since 1988, the Yamanashi Prefectural Museum of Art has held various programs combining art appreciation and creation. Among these are “Drawing Millet”, “Essay Contest”, “Writing Contest” and “Poetry and Drawing Contest”. Such programs were then developed into *A Museum Made by Everyone* (also known as *Minabi*), initiated in 2002 and held for the 20th time in 2021. It has established itself as a project in which anyone can take part, be they adults or children, people with or without disabilities, artists or non-artist members of the public.

In this article, we will divide the 20 times that *Minabi* has taken place into four overall phases, reflect on them, and verify what has been accomplished, with the intention of utilizing this for future museum education projects. During the first phase, poetry and artworks were submitted for exhibiting, while workshops and other events were held. During the second phase, the name of the project was changed twice—first to *New Minabi*, then to *Fly out from the Museum! Workshops for Sowing the Seeds of Art*—where workshops were held at various locations around Yamanashi prefecture. This enabled the participation of those people who lived far away and were unable to visit the museum in person. The third phase began in 2013, when the project’s original name of *A Museum Made by Everyone* was restored. This phase took the form of tackling one main theme over the course of three years and establishing separate sub-themes in each of those three years. The fourth phase began in 2019 with the implementation of workshops and exhibitions centered on artists invited by the museum. This phase has been an ongoing process of trial and error, with the aim of providing opportunities for visitors and participants to come into contact with art.

山梨県立美術館研究紀要 第 34 号

2022（令和 4）年 3 月 25 日発行

編集 山梨県立美術館

山梨県甲府市貢川 1-4-27 〒400-0065

印刷 株式会社島田プロセス

発行 山梨県立美術館

山梨県立美術館 ©2022

Bulletin of Yamanashi Prefectural Museum of Art, No.34

Publication date: 25 March 2022

Edited by Yamanashi Prefectural Museum of Art

1-4-27 Kugawa, Kofu-shi, Yamanashi, 400-0065 Japan

Printed by SHIMADA PROCESS Co., Ltd.

Published by Yamanashi Prefectural Museum of Art

Yamanashi Prefectural Museum of Art ©2022

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

No. 34

KURITA Koichi—Before “Encountering” Soil

OTA Tomoko

Research notes : The role of art museums in relation to healthcare professionals,
centering on examples from North America

SHIMOHIGASHI Kana

Looking Back on Twenty Years of *A Museum Made by Everyone* (*Minabi*)

AMEMIYA Chizuru

YAMANASHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART